





特261  
820



問外漢ニ禁ズ





## 序

此の眞れ寶五大寶典は御本席より河原町初代會長  
深谷大先生が頂き、其の高弟に分ちた、原本をそ  
の儘印刷したもので金の力で容易も求める事の出  
来ない、實に大切な我が御道の生命とする極めて  
尊い寶典であります故よく研究して末代の家寶と  
して保存せられんことを。

昭和二年十月廿六日

於御地場編輯者敬白



真乃

真乃

乃正之

乃正之

乃正之

乃正之

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.



眞の寶(上卷)目次

世界八方の理……………	一	一年中節の理……………	二六
八方八柱の神御神心……………	四	一日の刻限……………	二八
十柱 神天理王命……………	六	八柱神身體世界御守護……………	三〇
一日の理……………	八	八柱神眞事と埃……………	三三
一年の理……………	一〇	八柱神人間に入込日日の御守護……………	三六
四季土用の理……………	二二	八柱神及御心……………	四二
人間一代の理……………	四	八埃の幹より千筋の枝葉……………	四六
人體四方の理……………	六	八埃の裏表……………	五〇
人體四季の理……………	八	八埃の裏表……………	五四
世界八方身の内八方の理……………	二〇	八つの心使裏表心に悟る理……………	五八
人間五倫五體世界五行同一の理……………	三三	八色の意味……………	六〇
八方八色の理……………	四四	一日と一と月と同一の理……………	六三



一年と一月同士の理	三	陽氣本元の理	二二
一日と一年と同一の理	三	五臟の譯	二三
人間一代の理	六	指の理	二七
九四の譯	六	誠の譯	一九
大小閏の譯	七〇	勤の譯	二八
朔日満月晦の理	七三	言葉の大切なる心得可きの理	三五
朔日晦の譯、月の出入の譯	八七	五音の元本	三八
満潮干汐の譯	八八	(衣食住)機の理	四〇
満潮干汐の理(其の二)	九二	着物の理	四一
月の出入の譯(其の二)	九三	膳の理	四二
太陰太陽	一〇一	りきもつの譯	四四
九曜星の譯	一〇五	文具の理	四五
人體の名稱	一〇六	屋敷堅め石搗の理	四六
交合交際の譯	一〇八	宮社堂館の理	四七

鳴物の意味	一〇	十路盤の理由	一七
神様供物の理	一五	地球を國と云ふ理	一七
供物道具並に飾付の理	一五	四季の理	一八
七福神元本の理	一五	人間の内の事	一八
正月祭十二月の理	一五	子のやごる理	一八
神を祭る理	一六	夫婦交合を色事と云ふ理	一八
九つのなり物の理	一六	乳の理	一九
草木に花の咲く理	一七	月様は萬物の元	一九
竹に寅と云ふ理	一七	世界地震ゆる理	一九
牡丹に唐獅と云ふ理	一七	雷の理	一九
庚申の理	一七	こゝろるやせるの理	一九
湯だちの理	一七	嫁入りの式の理	一九
敷物の理	一七	草木のいきの事	一九
印形と肉の理	一七	よあいつよいの理	一九



負た勝たと云ふ理	二一六
やさしいと云ふ事	二一六
動物の三種	二一七
雨降る理	二一六
月様御姿を龍と云ふ理	二一九
こいしと云ふ理	二一九
風のふく理	二一九
開闢といふ理	二二〇
つき日と云ふ理	二二〇
からてんじくと云ふ理	二二〇
時と云ふ理	二二〇
四季の理	二二二
錢の理	二二二
女の子を糸さんと云ふ理	二二五

神の御顯現	二〇六
瓜と茄子の歌	二一七
松竹梅の理	二一九
菊桐の理	二二〇
正月祝ひの譯並に門松を立る理	二二二
嶋臺の譯	二二三
十千十二支の本元	二二六
男身體の五倫五體	二二七
女身體の五倫五體	二二八
夫婦の五倫五體	二二九
高天原龍宮の譯	二四一
十二支の譯	二四二
御授の掟	二四六



世界八方の理

子丑寅を北とゆい  
卯辰巳を東とゆい  
午未申を南とゆい  
酉戌亥を西と云也





八方八柱之神御神心





八方八柱神天理王尊

伊弉諾尊伊弉册尊は月日二神に副給ふ天にては  
 天の川をへだてて、七夕の二星と現われ給ふ。  
 又雲讀尊は一名豊樹淳尊とも申し  
 又大食天尊は一名大日雲尊とも申し  
 大戸邊尊は一名大苦邊尊とも申す







一日の理

子丑寅をよるこゆい  
卯辰巳をあさこゆい  
午未申をひるこゆい  
酉戌亥をよいこ云也  
即十二時なり  
八つ半夜晝共に真中



一年の理

冬至より三月を冬と云い  
春分より三月を春と云い  
夏至より三月を夏と云い  
秋分より三月を秋と云也  
春分春彼岸の中日  
秋分秋彼岸の中日

大寒のあき冬の真中  
大暑のあき夏の真中







四季土用の理

則ち土用四郎といふ日

より半月なり

春 夏 秋 冬

の 中 節

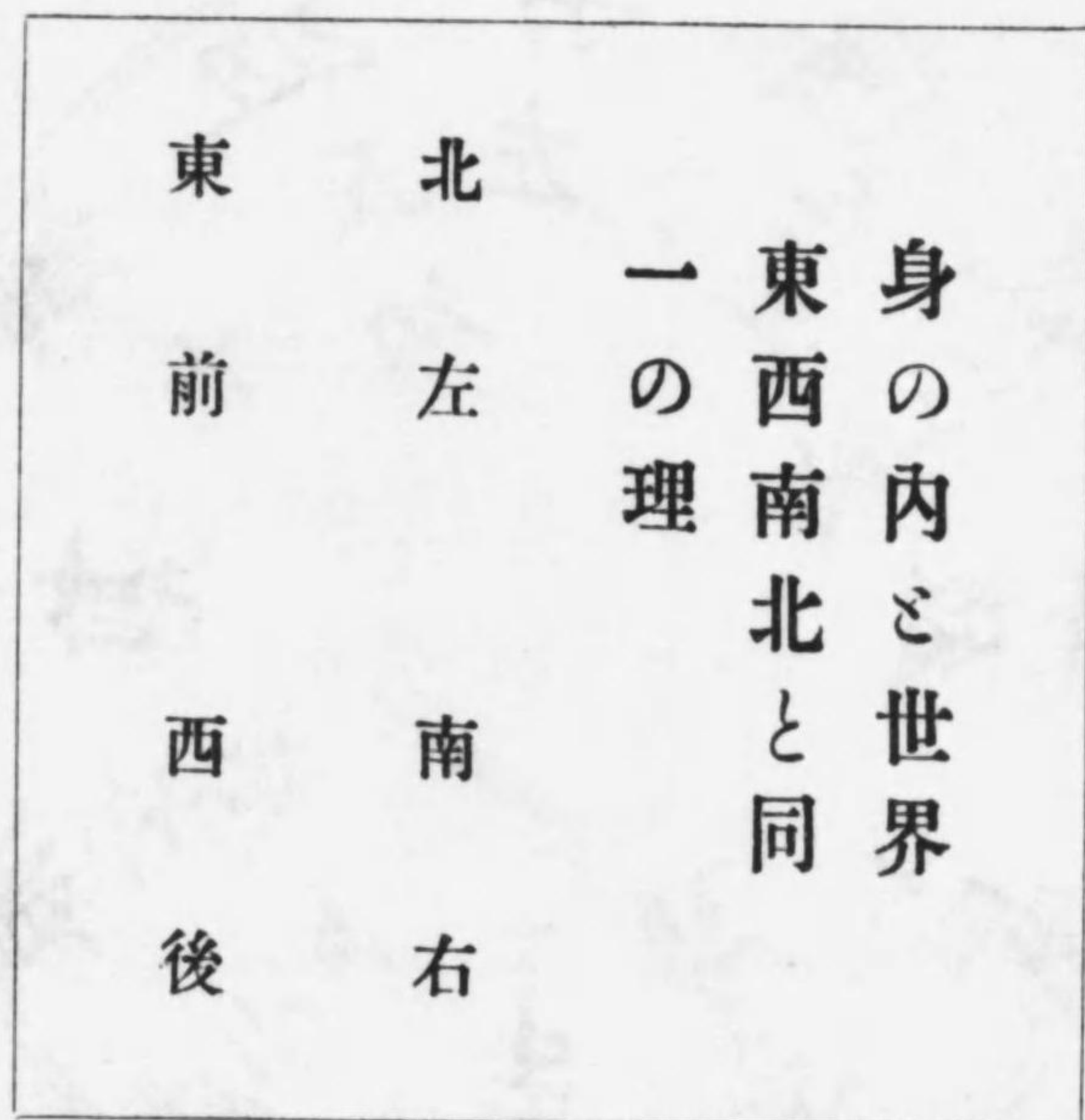




人間一代の理  
 一年と一日と同一也  
 五年と一月と一時と  
 同一也

一歳より十五まで幼と云い  
 十六より三十まで若と云い  
 三十一より四十五まで壯と  
 云い  
 四十六より六十までを老と  
 云ふ









身の内四季の理  
 冬春夏秋と同一  
 の理

腹	頭
春	冬
背	顔
秋	夏





見盡くせんを  
 法と云ひ

見盡くせるを  
 方と云ふ

世界の事

人の事





人間五倫五体世界  
五行 同一 理  
十則 千

五倫は首より上  
心の働き  
五體は首より下  
身の働き





八方  
の  
色

赤ひ白しろ夏

青よ黑くろ冬

惶おそ面おもて足あし尊たう

大おほ食く天てん尊たう

黄わう柑かん秋

大戸邊尊  
月讀尊

水みづ綠ろく春

雲讀尊  
國狹槌尊







一日の刻限

時、旬、刻限と云ふ事が一番大切なり、或は怪我過失火難病難等總べて善き事悪しき事萬事其起つた時刻も神様、物體も神様、身體も神様、時計は龍頭と云ふて月日也、夜十二時より午前二時迄が子の刻月様の刻限二時となれば丑刻となる二時より六時迄が丑寅の刻大食天尊六時となれば卯の刻となる、六時より八時迄雲讀尊八時より十二時迄辰巳以下同じ。一日も神一と月も神一年も神。身の内八方世界は八法萬物皆八方の神様より外になし。其の神様には御心及御役も違い御守護の四季刻限が有ものなれば其の神様の刻限に當つて起る事は各々御守護處及その物體と對照し定つたる天理より其出來湧現象に依つて明か也。譬へば怪我をなすとせば第一身體のケ所又次には之に對する物及場所。刻限などを見る又は其事情を見る。善惡共に其神様の刻限を逃れる事できぬ。









八柱神誠と埃

誠は冬の理、智慧は夏の理、金錢は春の理力は秋の理、誠が表に現れて智慧裏表なり、智慧が金を使い金が力を使ふ。

欲しい心の椒を切るは誠、分けてなくして心を續ぎ怨み猜み猜み嫉妬の心を起さざるは金錢。悪口仲言笑誹謗の心を使わざるは智慧。自慢我慢高慢の心を捨て、人を立つる心が力と言ふ。

欲しいといふ心の埃を去り悪因縁を切ると云ふ心になるによりて心に誠といふものが出来る、惜みの埃、出惜負け惜み等の心と人を憎む心を去つて智慧と云ものが出来る、即ち天理を悟る智慧なり、論ず考へる智慧、我身可愛埃別隔ての心と人を怨み妬たみの心を去るから金錢並に食物が出来る、高慢我慢等の埃と人を立ぬ我身丈立て我意を突張る心を去つて力が出来る即ち心の力なり人を助ける教える道の力なり、尤も身體の力量は其内に在

り、以上神の心(宇宙の真理)に叶へば如何程でも心次第に徳は備はる神より授かる智慧も力も神の貨物日々常に心使ふ其使ふ心一つが我がの理、心の理に依て與わる出来る。

又春はめぐむ恨み隔ての怨。夏は茂るもえる惜しむ隔ての怨。秋は實乗る高慢取込みの怨。冬は根に入る欲しいの怨。

人間の内は借物心一つが我がの理心一つ一つの心と云ふ其心と云は我がの理といふ一つの心は八つに働らく、ほしい、おしい、うらみ、はらだち、かわい、にくい、よく、こうまんど云ふ是れが心の働らきといふ。其働らきに裏と表がある使ひ様使ひ場所使ひ道が間違へば埃となる、水も火も風も(此世界第一の寶)大切といふても時に或は洪水となり火難暴風となる此同じ大切な火水であれど所變れば難といふ。人間の心もほしいもおしいもかわいも無くてならん心なれども只めんく〜に我身ほしいおしいかわいの心では埃となり罪を作る、なれど物大切人大切人を可愛と思ふて落さん様捨てんよう落ちる人を惜しみ毀れる品敗れる品を惜しみて通るは誠なれど、我身惜み骨惜み人に與ふる物惜しみは誰れから







八柱神人間に入込日々の御守護

男神五柱は人間に取て男の理、一家に取ては夫の理、女神五柱は女に當る、一家に取ては嫁の理。併月日二神は人間に取ては總て主宰者辛故親主君或は親方とか一家に取ては主人主婦父母等。人間のする事は一つもない皆神様なり、男神は男に入込女神は女に入込み世界も身の内も同一に御守護下さる皆人間の自由用が神の自由用御働きである。神様と身の内と別々に思ふて居ては天理は分らぬ。神は身の内に御座るなり。神様と身體を一つに考へねば悟り論しは明かに分らん。

一日の刻限にては午前二時丑の刻より寅卯辰巳午の刻迄(八つ七つ六五四九つ)女神様人間に取て女に當る。午後二時未の刻より申酉戌亥子の刻迄(八つ七つ六五四九つ)男神様故男の理云々讀尊也。夜九つ子刻月様一年に取れば冬至丑八つ冬の土用、大寒大食天尊卯刻明六つ春彼岸云々讀尊辰刻五つ春土用國狹土尊書九つ午刻日様夏至未八つ夏の土用

大暑惶根尊、酉刻暮六つ秋彼岸大戸邊命戌刻五つ秋土用月讀命皆八社の神。人間も同

一代に取ては生れて五年間子國常尊。六歳より十五歳迄丑寅大食天尊、十六歳より二十歳迄卯雲讀尊。二十一歳より三十歳迄辰巳國狹土尊。卅一歳より卅五歳迄午面足尊。三十六歳より四十五歳迄未申惶根尊。四十六歳より五十歳迄酉大戸邊尊、五十一歳より六十歳迄戌亥月讀尊皆八社の神人間も同一也。身の内は神様の物であると云事が慥かに分つて腹に入れて居たら論しは誠に容易なものである。

又我一人の身と云小さい事を樂むと云ふは一代の苦しみ通りて居るも同じ事、世界を見て樂しむ親様の御心伺ふて樂むといふは、どれ丈大きいとも高いとも分らん、我身はも十分といふ心定めて足納せにやならんが道は十分と思ふたらころりと違ふ、どうしても親様の思召の處迄と云ふごうでも、しきりた日に遅れぬ様刻限に違わぬ様と、是れを心に掛け樂むと云心なくばならん。人間は日先の樂みや日々食ふ事着る事又色々むさくろしい事を深く樂んでどうもならん不足を思ふ故樂み深く感ずる、例へば日々食ふ事に不足



三八  
くを思ふて居る者程食ふ事に深く樂みを持つ又深く味を感じると云様なもの世の中に  
鹽は鹽の味と云ふ、味噌は味噌と云ふ鹽は鹽でよいのや鹽が味噌と同じであれば間違ふて  
いるのや、ごちらが嘘であるか迷ふて居る如し、夫れは夫れだけの事にして其用に重きを  
置いて通ればよいそれを用よりも體々よりも想々よりも美と云ふ味と云ふ肝腎の用が分ら  
んようになる。甘い物と云ふと食過ぎるが如く世の中の物何が一番結構か樂みかと云ふに  
食物が樂みと云ふても、それを段々貪りて見よ物に味があるふまい美食にも飽きてとんと  
樂みなく通りている人もあればまづい物でもおいしいと樂んで居る者もある。是れごちらが  
食事の樂みにしているか酒かと云ふても酒につかりて勤めて居る者に取つては樂みにして  
居らん其心と水飲んでもあゝ息ついたと云ふて居るのとごちらが飲んで樂みが有るか。す  
れば物に別はない又同じ心の理は八つ同じ身體で萬人同じものなら一つ味と云ふ身上に別  
もない只心一つの治め方ばかりや。世上どんな物をも眺めて見ればどんな足納もつくど云  
ふ又足納眞から治めたら不足と云心も起らぬ、別に望む心も出ぬ望まねば別に深くも感じ

ぬ之れは之れの味と云ふ丈けのもの樂みとも苦しみともならん。是れでなくてはならん、  
只天の拵へ御與への御心を喜ぶ丈けになる凡夫と云ふ物は樂みある様思ふ者は物丈けの  
もの、何程結構な物と云ふても我れに持つて居る心の理に依ては樂しみとならん事が分ら  
ん。天の御心盡しの理が分らん金も砂の如く數有れば大切でない酒も水の如く多ければ大  
切と思ふまい水も酒の如くせねば取れぬ物とすれば酒の價がする。物より外に樂みがない  
と思ふ凡夫、眞の樂みを知らん者は其場々、丈のもの續かん様な樂しみ、酒を飲む飲んだ  
ら酔ふ酔ふたら要らん要らんとつたら酒の樂みあるふまい花を見る見たら一時樂む何程  
も見れば飽きる飽きたら花は樂みとならんそれなら何が心に眞から樂しい眞から嬉しい面  
白いと云か何が切目ないかといふめい々名が樂みか賞られるが樂みか、好き嫌い、此心  
は何處から出るか一つの癖とも云ふめい々因縁心とも云ふ、人に可愛がられて好く者も  
あり人に立て、貰ふて好く者もあり是は十人々皆違ふ中に高慢の人は可愛がられて喜こ  
ばんかわり立られたら何よりの妙味を感じる是れ高慢心有故である。親様の御心はごうし



て貰ふて喜ぶこと云ふでなく立て、くればめい、く立られる理を拵へ共に理が賑やかに  
なるで樂み給ふ何もめい、くにごう望み給ふのやない思ふ理を返して下され返せば樂  
いやろふそこで誠結構と心計る其心の喜ぶ理を見よふと云ふより外に御心はない。親様は人  
間に心一つを授け萬物は親様の物それで心を受取りて物を與へ下さる是れ物は天の心の籠  
りたる物心一つに依りて天より如何なる事も自由用といふそこで眞心一つを天へ供へて通  
る程誠はなし樂しみはなし心一つに日々感謝と云ふ日々戀しいと云ふ日々親の理を眞から  
奉る心。借物が分れば心一つより外に我れはあろふまい、神の魂と云ふても理を分け  
て八柱と云ふて理は天の心天の力といふて別に天より働いて居る働きは皆月日様の光月日  
様の力なり。日々互々助合ひ立合と云ふ互に人の爲めを思ふ人の樂み見て樂むと云ふ心よ  
り誠はない誠の樂みはない是れが元々親様の思付きとも云ふ、又此心が元となりて今日世  
が出来萬物が出来御苦勞下され只此に止まる是れより外にない。人間互々結構と云ふ心  
を使ふから見て樂み樂しむ心を見て樂しみ下さる是より外にない。

四〇





八柱神及御心

仁は月様の情より仁が出る人を慈愛しむ。養ひ育てるといふ親心。相互に人に満足與へる誠義は惶根尊から出る。云ふた事を違えぬ約束を違えぬといふ心。即ち互人を立る心。禮は月讀尊から出る、君に忠親に孝をすると言ふ人を大切にする心。即ち互人を立る心。智は大食天尊より出る、是れは互に知り合ふと云ふて我れの知つた事は人に教える互に知りて行くといふ心。見分分け噛分る心。信は國狹土尊より出る互に睦じく續ぎ合ふ親しむといふ心、即ち人を續ぐ心。木火土金水といふも地水火風空と云ふも仁義禮智信と云ふも同じ五行の人道である。是は儒教から出て居る言葉で孔子に月日が入込んで教へられたのだが其の本が分らなしたのである。

惶根尊は義の神様、交際義理の道も同じ、此神様から義と言ふ事は出て居る。總べて皆月日二神より出る徳なれど義は月日より惶根尊に御任せ有る也併し之は餘り偏よると偏窟になる。所謂仁過ぐれば弱となり義過ぐれば偏窟の例へ。以下禮智信同じ。皆裏表にて

八柱神の心

又なむあみだぶつうの意味を人間及一家に取ればなほ國常立尊の理を夫、亭主よりなご云出し云ひ付ける理。

むは面足尊の理で妻、夫の仰せに従ひむと答へ飲込み受ける理父母と云ふは天地夫婦なり。なむと云ふも同じ事天地日月同じ事地と天とは實の親なり。(水氣潤ひ温みも同じ) あは國狹土尊の理で女一の道具の神様なり。又亭主の働き得る續ぎ物を待つて妻子があご口をあけ開く理。(皮續ぎも同じ)

みは月讀尊の理で男一の道具の神様なり。又物實を與へみを入れみを立て養ふ理。(辛骨突張りも同じ) だは雲讀尊の理で人間を胎内に宿仕込み被下る時の理。又兩便をだご通じ下さる理。(吞食出入水氣昇降も同じ) ぶは惶根尊の理で、ぶくつと懐胎する理。又日々ぶうくと息をする理。(言葉風吹分も同じ) つは大食天尊の理で、胎内肉縁を、つご切と下さる理、又死する時息を切り玉ふ理、(切分も同じ) うは、大戸邊尊の理で胎内より引出し下さる理。又うんよくうと生れ出る理(導き引伸ばしも同じ)

元々泥海中に月日居たばかりで御互心と心の陽氣見合ふて通るより多く小供拵へて陽氣



を見よふ樂みと云ふ理を始めよふと思召され人間を始め陽氣の者を拵へ陽氣暮しの理を見  
 て樂まうといふ思ひつき、なんと世界を始めかけたら、日様に御心示し給ふ御相談といふ  
 奈と云へは無と云ふ、むハ睦しいともいふ是れ互々の心の誠を通ふと云ふ又向ふが此方を  
 思ふ思ひと其の思ひが一つに成りた理好きも嫌いも樂みも一つとし給ひ目的も一つとし給  
 ふた理である異存不足の無い處、はい結構と人間に譬へば戀人に呼ばれて答へるやうの理  
 は末代生涯變らぬ理となりて始め給ふた是が此世の元、又人間の思ひと違がう違う筈や世  
 界は神の物皆自由にならん物は一つもない無理すれば一時ごんな模様にも變へられんでは  
 ないなれと親といふ子と云ごうもならん理は可愛一條であるごうしてなり共ごうしてなり  
 共踏張つてやりたい及ぶ限りは出来る限りはと云は是れ有難き親の理御心そこで道も年限  
 遅くれたと云は皆心とんと揃わんからやなれと是一時揃へられん事はないが成るべくなら  
 日を延ばしてなり共一人でも多く一つでも苦しみせつなみ見せん様と云は眞の御心と  
 通らにやならんなれと一時に迫れば皆々苦しむごうもならんから遅く来て來たのや。





八埃の幹より千筋の枝葉

身の内の理は身内御守護處に依りて明か也。一日の理も一代の理も辰巳に當る時此時に起る事は縁談色情金錢の間違の理が起る。此道に關し續ぎを切つた埃、即ち恨みの埃が現れる。此埃が作てあれば此御意見身内に現れ。又此時に事情が起り或は迷い或は苦み失敗死亡等。

一日に取れば五つ四つの刻限一代に取ては廿一歳より卅歳迄十年間は國狹土尊前世に此道に大きな埃が有つたら此時に死んでしまふ。(大抵は色情)又總べて前世に因縁を作つた刻限になると病が重くなる、或は其事情に迫る。戌亥も同じ理に取り悟る事、されど月讀尊様には氣の短い剛情、人を踏倒す心立てべき處立てん腹立の埃、其性質に悟る一代に取れば五十一歳より六十歳迄。又六十歳より上は元の一に戻る還曆、同じく未申に當る時現れる事人の害を成す風を吹かして有る言葉で人を倒して有る即ち憎みの埃が現れる卅

六歳より四十五歳迄惶根尊様。丑寅大食天尊様も同じ理に取り悟る事然して丑寅は慾の埃、其性質、例ば人を憎む埃も身慾より起る如し。皆此の如く天の理を知るなり神様の御心と人間心の埃とを悟りて論す。論しは裏から論すか表から論すかは是れが見分による是れが肝腎なり。併して人に怨腹立てさす様な者は我れも怨腹立の埃有る。一家でも内輪である心は外にもその心ある如し。

水は底きに向ふ底きに宿り静かな處に威が有る火は高きに向ふて空を思ふ賑やかな處に懐かしき理が有る人間は片寄りてはいかぬ。空も下を思わにやならん、なれど理は天が臺天思ふて下思ふと云のでなくばならん、下思ふ故天思ふといふは元を知らぬ故なり、如何に天に無理ありても下従わにやならず下され丈け苦しくとも天の爲には勤めにやならんとは心に持つ理さればとて天は親無理を云ふ事は一つもない、下を思ひ下さる一條の外はない心の臺と云ふ根といふを天に置き天の思召一條に添ふて通らにやならん一つの心に智は借物氣も借物心一つの理は皆同じ事(理氣智水火風も同じ)なれども天の親神の御心入込み







八 埃の裏表

欲いから惜い。腹立は恨みより生ず恨みでこらへておいたら國狹土尊の御意見なれど恨みがこらへ切れぬゆへ腹立となる、腹立は恨が元我身を恨みて居れば腹立にならぬ、又腹立から恨となる、可愛と憎みが裏表我身が可愛から人が憎い人が憎いから我身が可愛。慾と高慢、慾から高慢、高慢がしたい故慾をする。

辛、甘、苦、酸、四つが食物味の元。月様の辛味に苦味が合ふて鹽となる、にがりが出る、是が月様御苦心の理、味の王、四の王。甘味は日様の慈悲の現れ、味は初苦く酸くなれば終り春苦いものが酸くなる秋の理。

食物の味は神様の眞實心味なり。神様の御心味と人間心の味との別が有。月様は情け水心誠治まる心人間足納は誠正直水心にて天の理に依まる足納の理が治らねば不足不足から腹立高慢、憎み、惜み、恨み、可憐となり遂に慾で固つてしもう悪因縁の暗

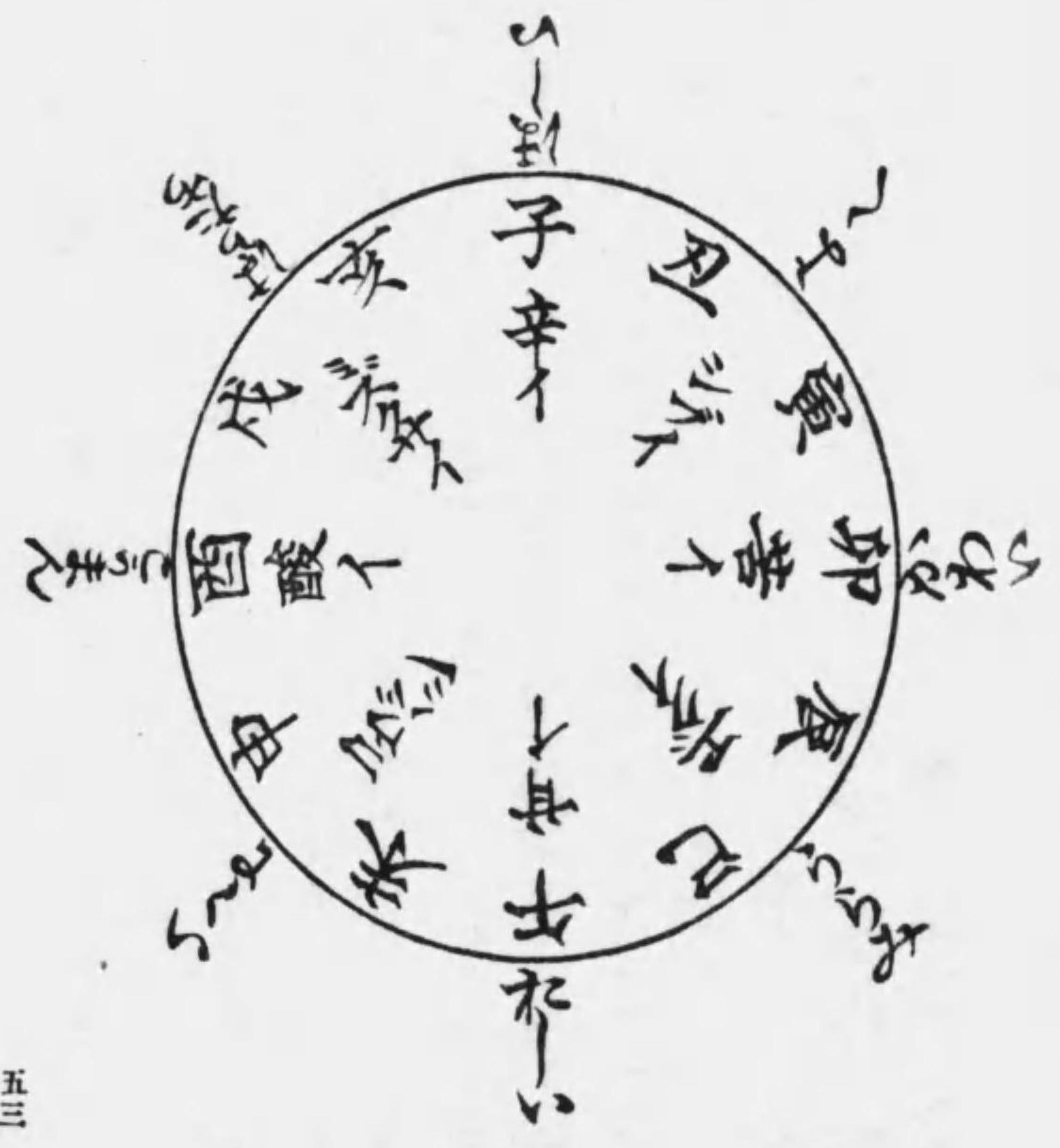
間に入る。(逆廻り埃)

足納の理が治れば慾が切れる足納に依て前世の悪因縁が切れる心に神の明りが入る恰も丑寅刻を切れて卯刻に至れば世界が明るくなる如く心鮮かに正邪理非判然となる。慾分隔なく人を續ぐ續がる慈悲人を育てる、満足與える高慢が無くなる故、我身に徳がつく人を立てる大切にされる心になりて我身が立つ。慾を切るは思切諦め聞分と云ふも同じ理聞分よきは思切(物の區別區域をつける)よき理心定めるも同じ誠無く心小さく則ち慾深くして思切心捌きの出来ぬ時は心發散せず精神清淨綺麗に成る事能はず。思切無き心の定まらぬ小さき心が慾にて穢ないと云ふ。

又欲いと云ふも我身へ斯ふして欲いどうして欲いどう思ふて欲いと云ふのが人間心只どうしてこうして欲いは自分の他の者ど者との勤め合をさして共に樂ましたいめんくには何を取るのやない只見て樂しむと云ふは親様の御心人間でも小供にどうして欲いと云ふは眞の親の理であるふまい只どうしてやつたらと云ふやりたいばかりに親の心を知るのを待



つて居る何處へたよらいでも大丈夫な親に力あるそれを知らしたいと云ふは立て、欲いや  
 崇めて欲いからやない頼よりを認めさして心安心さしたい故であるそこで心に理を受けて  
 自由用さして下さる何思ふても親様の心と一つ理といふ同じ事思ふと云ふのやない同じ理  
 を思ふと云ふのやそふして時々浮んで来る天から寫す又時々知らずくの様に言葉出る皆  
 天より話し、て居る天より口を借りて云ふのや、皆誰れでも心澄ませばそれ相等に理は借  
 れる又氣も借れる智も借れる、是れどんな者でも何んでも自由用といふ、借物の身と我れ  
 の物と分けて見よ神様の力、理氣智、と分けて見よそれは一つ只欲い惜い可愛惜い恨み腹  
 立慾高慢是れより外は我れで無し是思ふ丈より働無く力無し、之を現わし下さるは皆神也





八 埃 の 裏 表

欲いから惜い、腹立から恨み我身恨めば腹は立ぬ、憎いから重慾する人が可愛かつたら強慾はせぬ、例へば物を買ふても同じ人はごをでもかまわんと云心が慾故憎みと裏表人が可愛かつたら値ぎりこぎりはせぬやうなもの我身可愛のは高慢がしたいから頭を高くするのは我身可愛から八方に分けると八通りになつて別々になれども皆裏表一つなり。子と云へば北丈けと思へども南と云ふ、北と南とが根子に根有つての八方八埃も欲い惜が根也此二つが守れたらば人間は立派になる八埃は之れから生ず。人を憎む悪口仲言吹きまわすも慾から我身可愛から人に與へぬ引出さぬ、人を押へる身引身勝手行届ぬ高い心、我身に欲いから人に惜む、惜むは欲いから惜いから欲い、例へば我身が人に見上げて欲いから負惜、慾を切るから人に満足與はる見分聞分思切は智慧立てるから續がる繼ぐから立つ身が立ちて働くから續ぎ出来る續ぐ心ないから立てん、誠がないから惜む小さい心。

欲い心の埃を使ふが故に月様の御恩守護が分らん。惜い心の埃がある故に日様の御恩が分らん。以下同じ皆神様の眞實を無にする止めるものが即ち八埃なり。

又此世界萬物は八方の神様に依て悉く造化せられたるものなれば萬す一切は八社の御苦勞八通りの理より現われてあるものにして殊に人間は神の御心の現われにて神の宿り所として身體は神を祭る所也。恐れ多くも八方の神様には皆一方利きの御神徳にして八社の神が一つに纏まりて現はれ下さるものか人間身體と成り靈魂は月日の分魂である故八社の神は月日に副ひて入込其分け下されたる神魂に附添ひ下さる故八社の御心徳及ぶ御働きを一身に具備して其自由用を現わす。(それ故に恩に盡されば牛馬とも落ちる勝手な事に神様を使ふから迫る)

身の内に八社の神が入込下さるが故に其の性を受けて其心が働く即ち八方の神にて構造せられし人間故其原質の性より出する八通りの誠が働くと共に埃も八通りより生ずるなり八ツの埃は神の御心より出るものにして此本を能く悟らして頂かぬ事には天理が分らぬ御







八埃裏表心に悟る理

思切の悪るきは恨み七の表三三の裏七慾から恨み。四と六腹立から憎み荒い言葉が出る憎みから腹立。五と五我身も可愛人も可愛之は埃にならぬ之れは天理に叶ふから裏表は無いと云ふてもよい。二と八表に高慢があるから心の底に惜みあり惜みから高慢。一の裏九欲いから苦をする此世の苦は欲いから苦第一物の始が欲い、物の始りも埃の始りも欲い例へば高慢がしたいゆへ埃の方にはきばつて出すが眞實の方にはよう出さぬ自慢や高慢で人にわるく云われよまいきたないと思われよまいといふ心で出している故心には惜い惜みが生ずる高慢がしたいから惜む心、例は惜んで與へぬ人に物を教えぬが如し。人に負けるべき事又負けて我身に徳が付く理に叶ふ處を負惜み負けても負けん我慢高慢なる如し。慾切る事切らぬ分ける事分ぬ慾から人に恨みを受るも又我れが思切諦らめをせず人を恨むが三恨七慾皆裏表なり。皆埃は十の理也。金の國狭土様に切れる大食天様の如く裏表にて十社となる。是れは埃の裏表とは違ふから論しには使ふ事稀れなれど我心に悟る理也。





●八色の意味

八方の神様の色で、萬物が染まるなり。青は大海晴天の色、青いと云ふは皆、世界萬物身の内悉く月様の理、赤は火照光一切明かい、赤いと云ふは、皆日様の理、陰陽御夫婦の理也。緑は國狭土尊、木葉ごか、竹ごか緑色一切、黒は皆大食天尊、例へば鳥でも鳥ごか九官鳥鶉の如く天然物で黒きものは勿論、白いと云ふは一切惶根尊白は風。水青く風白くと云ふて風で皆物が白くなるなり。彼の雪の如し、雪は六花と云ふて惶根様の理、言葉面白す申すと書、雲讀様は水色、萌黄も同じ萌え出する色芽出し。草一切の色、淺黄とも同じ。萬草草木粒毛、春は萌黄、淺緑が緑となり、緑が秋になれば黄となり、柑色となる如く皆夫婦の理。黄は一切大戸邊尊、柑色は月讀尊、秋の神様なり。黄が濃くなつて、柑則ち黄に赤合すれば柑となる。水氣が去る干るに従つて黄柑赤と色變る。又紫は青六分赤四分が眞正の紫、月日和合の色にて色の王と云ふ、緑は青と黄の合

色宇宙萬物の色合は八色及混合して皆濃淡彩色せられて有る、又白は風無色とも云ふ故所謂太陽の七色と云ふが如し。眞の元色は青、黄、赤、白、黒、五色なれど陰陽合體八方の神様の理にて、八色に分かる、人體世界萬物は八色により同じく合色により各々其神様の理を知る、例へば人體頭は青地と云ふて水月様、冬髪は黒色に大食天様、顔は夏、赤と白、赤味なき眞白く青いか如きは薄情の相といふは日様の色がないから火氣、誠を失ふた埃有る色、色黒いは慾が深い、細かく行けば顔でも八色が現れる、皆其心使が現れる也但し心が澄まねば明細の事は見分らぬ。身體或は病でも、又總ての物、白い物が黒くなるごか、赤い物が青くなるごか、本色を失ふて色々濃淡變色すれば其理を知る也。總て天理は宇宙全體全般に渉る事故、一々是を縦横細密に説明せんとすれば、到底筆紙にては其眞味を會得し難く、盡せぬもの又神様の御言葉は一を聞いて十を悟る十のものを十聞かねば分らんやうでは天理は容易に分らん故、神様は皆悟りばかり論しの御言葉下さるは深き思召の有る處にして、我々の力を付けて下さるものなり。心を練らし磨かせて下さるは魂



に末代の徳を授けるが爲めなり、心の成人次第に皆分るなり。

又人間の眼には鮮かに見へぬども、一晝夜でも神様の刻限によりて、世界の色變ると仰せらる、子の刻は青、丑寅の刻は一晝夜で最も暗黒の時、卯の刻明け六つ曉方水色、辰巳刻縁、午刻赤明か、未申の刻白、そよくと風起りて一食夜で最も明白の時、白晝、酉の刻暮六つ日西に傾く頃黃、戌亥刻柑、黒夜と云ふは丑寅の刻白晝と云ふは未申の刻、一年にて寒暑と同じ、あやこいふは黒白の事なり、即ち夜晝にて丑寅大食天、曾、未申惶根曾なり、一日も一年も一代も同一に御守護下さるなり。

萬物の青いと云ふは水といふ理にて月様の御心苦勞と云ふ理なり、宇宙海河の青く、山野青々として繁茂する森羅萬象は皆水より現れ、苦勞と云ふ理が榮えて居る也、月様元々無き人間、無き世界御造化下さる御苦勞の理、月様辛味に苦味が合ふて潮となる、鹽は味の王、四季四方四王、人間も苦勞と云ふ理が最も尊き事なり、苦勞と云ふ理が有つて萬事榮え成立つ。

●一日ご一月ご同一の理

(一日にて夜丑の三時は一日より八日迄、朝辰の三時は八日より十五日迄、晝未三時は十六日夜九つより二十三日迄宵酉戌亥の三時は二十三日より晦日宵戌の刻迄なり、(一日夜九つ子刻より三十時、即ち二日半、三日朝巳刻迄)、(三日の晝九つ、午刻より、五日宵の四つ、亥刻迄)、(六日夜九つ子刻より、八日朝四つ己刻迄)、右七日半にて九十時は一日三時と同一にて一ヶ月七日半四つ、即ち三十日、三百六十時は一日十二時と同一也。一日の一時と同一の月三十時と一日の三時と一月の九十時と同一、一日十二時と一月三百二十時と同一の理なり、七日半九十時、十五日百八十時は満月、三十日は三百六十時暗黒也。

●一年ご一月ご同一の理

冬至より三ヶ月九十日間は一と月にては朔日夜九つ子刻より八日朝巳の刻迄九十時、春



分より三月、九十日間は一と月にては八日、晝九の午の刻より十五日宵四つ、亥の刻まで九十時、半年百八十日、半月百八十時。夏至より三つ月、九十日間は一と月にては十六日夜九つ子の刻より二十三日、朝四つ巳の刻迄九十時、秋分より三つ月、九十日間は一と月にては二十三日、晝九つ午の刻より三十日、宵四つ亥の刻迄九十時と同一なり、一年三百六十日と一と月三百六十時と同一なり、三月節句、九月節句は一年中の大干潮時なり、一と月にては八日上弦、二十三日下弦、一年三百六十日と一と月三百六十刻が天の理なれど人間男女大小の理あるゆへ月にも大小の守護下さるなり、大が三十日、小が二十九日、人間男大の理にて五尺二寸、女小の理にて四尺八寸、人間始め世界始まりの時、伊諾冊の二尊五尺の人間に成ると云ひ玉いたる故五尺は一人前なり、男女夫婦にて一丈一とだけ男五尺二寸、女四尺八寸、四寸の差ひあるは一の道具の凸凹有る理、月に大小と閏月ある閏月は女に三十年間月水の御守護下さる理なり。月経又月役ともいふ。

◎一日と一年と同一の理

夜九つ冬至  
晝九つ夏至  
丑刻 殘 寒  
冬至 陰十一月廿一日  
夏至 陰五月廿一日  
大寒 陰十二月二十日  
朝六つ春分  
宵六つ秋分  
未刻 殘 暑  
春分 陰二月二十日  
秋分 陰八月廿三日  
大暑 陰六月二十日  
中半月節半月合して一月の理は一日にては上刻下刻合して一刻と同じ理なり。

一日貳拾四刻一年貳拾四刻の譯  
夜九つ 十一月中 冬至  
八つ 十二月中  
九つ半 十二月節  
八つ半 正月節



七つ	正月 中	七つ半	二月 月
朝六つ	二月中	六つ半	三月 月
五つ	三月中	五つ半	四 月
四つ	四月中	四つ半	五 月
晝九つ	五月中	九つ半	六 月
八つ	六月中	八つ半	七 月
七つ	七月中	七つ半	八 月
宵六つ	八月中	六つ半	九 月
五つ	九月中	五つ半	十 月
四つ	十月中	四つ半	十一月 月
			節

人間一代之理

五 歳 冬 至 六、七、八 歳 冬 土 用  
 二十 歳 二 月 中 廿一、二、三 歳 春 土 用  
 三十五 歳 夏 至 卅六、七、八 歳 夏 土 用  
 五十 歳 八 月 中 五十一、二、三 歳 秋 土 用

右土用の理壹年(冬十五日春十五日)六十日と一代六十年(幼十五年の内三年、壯十五年の内三年)と同一の理  
 最も土用四郎と云ふ日より十五日の間、十八日と云ふは土用四郎前の三日を加えて十八日也。八十八夜と云ふは人間一代の内にて二十四にて前厄なり、二百十日は四十二の後厄也。

身の内が出来て一日が出来来る。元々人間が此世に生れ出た故一日と云事が出来始まる一日が出来て一年が出来、一年が出来て六十年が出来来る。四季故に八方の神が四季十二支十二刻十二ヶ月五年づゝ三つ寄て十五年を一季とし、五年と云は六十一ヶ月、一ヶ月は閏月五年を十二合せて六十年、一年の閏年を加へ六十一一年が還暦と巡戻る。天理は冬が始まり十



五歳迄を冬の理、世界草木と同じ、冬の間は草木に色なきと同じ、十六歳より三十歳迄を春、卅一歳より四十五歳迄夏、四十六歳より六十歳迄秋の理、春は芽生じ一代の内最も花やか美麗なる時花咲き色氣が充つ、夏は茂る智慧盛りと云、又慾が強うなる、一日にては午未申の刻、秋は實乗る、(一と刻) 即ち二時間と五年と同じ理なり。(五年と一と月と同じ理) 十五年が一季、六十年が四季、一年と同じ理なり。

●九の四の譯

九つ午四つ亥九つが第一時、四つが第六時、一日十二時なり。  
夜九つ子の刻月様此世の始まり夜が始まり、晝九つ午の刻日様、月日は陰陽天地交合萬物の親様なり。一年に取れば冬至が子元、一代にては生れ出で五ヶ年が子、子は北南北が此世八方の根なり、夜九つ晝九つ月日有つて人間萬物を生ず、九の胸九の世界といふ。  
夜九つが始まり故九つが一つ、八つが二つ、七つが三つ、六つが四つ、五つが五つ、四つ

が六つなる故皆十となる。依て一九が九にて、九つが子の刻に始まり、九つに二つ目を掛合して二九十八で、八つが丑の刻、三九二十七で七つ寅四九三十六で、六つ卯の刻、五九四十五で、五つ辰、六九五十四で、四つ巳刻にて六刻四つ時なり。  
同じく晝日様九つにて始まり、一九が九、九つが午の刻、二九十八、八つ未、七つ申、六つ酉、五つ戌、四つ亥刻にて六刻即ち四つ時にて一晝夜終る。合して十二刻は十二支八柱の神、一日一年一代身内も同じ理、身内に有るもの世界に有、世界に有るもの身内に有。  
夜九つ晝九つ九九の本、算術の根元は皆此の理より初まる。宇宙の眞理は皆九九で理が出る也、算術と云ふ術法なり。或は測量とか天文とか總て是にて明算す。算術は天理より教えられたるなり。十路盤と云ふ、皆世界は十より無い十と云ふ世界なり。  
天理は根元、學問は枝末なり、此世の根は月様、子が一番の元、故に人間も子が宿るが始まり也。月泊まると云ふ月様宿り下さるなり。故に人間子の宿る所を子宮と云ふ。龍宮と云も同じ意味にて、身の内では子宮、世界では龍宮といふ。



●大小閏の譯

月に大小あるは男大、女小の形あり、故に親神其理を計り御守護被下は六十年に十二ヶ月五年に一月の閏あるは女に月水を被下なり。晦と云は月様全光悉皆黒くなり玉ふ則ち宵酉六つの三時にて眞闇なり、朔日と云ふは夜子九つの三時にて一分白くなり玉ふ、一日四亥四つ分といふは一年四季の理なり。四分宛十五は則ち六十分にて満月なり。十六日夜丑五ヶ年六十一ヶ月は一つの閏、六十年に七百三十二ヶ月は十二ヶ月の閏にて則ち一ヶ年なり。女

十六より四十五まで三十年の間に三百六十日の不用水在り、一年に十二日の不用水在り。一日子刻より亥刻迄月水満ちる時は働き不自由なるゆえに、三日或は長きは五日其して御守護被下は親神様子を憐み給ふなり。十八歳より四十八歳、二十歳より五十歳、十六歳より早さと五十歳より遅きは前世因縁と親の因縁の理あるなり。月經は天の月様の恵みなり、閏壬は雲讀様が水を分け被下理なり、女の魂は日様の分魂故三十年間の月水無ければ女は焼け死ぬ故、月様より授け下さる水なれど、女の身が日様の分身故赤き心寫りて赤くなる。總て血液は日様にて赤くなる。三十年間月様より夫れ丈けの餘分の水を御守護下さるで七十とか、八十、九十と、男と同様に連れて通り下さる月經は色氣の花なり、色氣なき者にはなし、世界にては桃の花と同じ理、廿九日の小月が女の理故閏月が月經なり、閏月があつて男と同じ事になる理なり。



●朔日満月晦の理

		朔日			二日					
	夜	朝	晝	宵	夜	朝	晝	宵	晝	朝
	寅七	卯八	辰九	巳四	午七	卯八	辰九	巳四	午七	卯八
	戌五	酉六	申七	未八	戌五	酉六	申七	未八	戌五	酉六
	子九	丑八	寅七	卯六	辰九	巳八	午七	未六	申五	酉四
	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
	三時にて									
	一分光を放ち給ふ									
	二分同	三分同	四分同	五分同	六分同	七分同				

		三日			四日		
	夜	朝	晝	宵	夜	朝	晝
	寅七	卯八	辰九	巳四	午七	卯八	辰九
	戌五	酉六	申七	未八	戌五	酉六	申七
	子九	丑八	寅七	卯六	辰九	巳八	午七
	の	の	の	の	の	の	の
	八分同	九分同	十分同	十一分同	十二分同	十三分同	十四分同
							十五分同



六日				五日			
晝	朝	夜	宵	晝	朝	夜	宵
申未午 七八九 つつつ	巳辰卯 四五六 つつつ	寅丑子 七八九 つつつ	亥戌酉 四五六 つつつ	申未午 七八九 つつつ	巳辰卯 四五六 つつつ	寅丑子 七八九 つつつ	亥戌酉 四五六 つつつ
の	の	の	の	の	の	の	の
同	同	同	同	同	同	同	同
				十九分同	十八分同	十七分同	十六分同
二十三分同	二十二分同	二十一分同	二十分同				

(上半月)				七日				八日			
晝	朝	夜	宵	晝	朝	夜	宵	晝	朝	夜	宵
申未午 七八九 つつつ	巳辰卯 四五六 つつつ	寅丑子 七八九 つつつ	亥戌酉 四五六 つつつ	申未午 七八九 つつつ	巳辰卯 四五六 つつつ	寅丑子 七八九 つつつ	亥戌酉 四五六 つつつ	申未午 七八九 つつつ	巳辰卯 四五六 つつつ	寅丑子 七八九 つつつ	亥戌酉 四五六 つつつ
の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
三時にて	三時にて										
				二十七分同	二十六分同	二十五分同	二十四分同	二十九分同	二十八分同	二十七分同	二十六分同
								三十分光を放ち給ひて半月と成給ふ	三十一分光を放ち給ふ		



十二日				十一日			
晝	朝	夜	宵	晝	朝	夜	宵
申未午 七八九 つ	巳辰卯 四五六 つ	寅丑子 七八九 つ	亥戌酉 四五六 つ	申未午 七八九 つ	巳辰卯 四五六 つ	寅丑子 七八九 つ	亥戌酉 四五六 つ
の	の	の	の	の	の	の	の
同	同	同	同	同	同	同	同
四十七分同	四十六分同	四十五分同	四十四分同	四十三分同	四十二分同	四十一分同	四十分同

十日				九日			
晝	朝	夜	宵	晝	朝	夜	宵
申未午 七八九 つ	巳辰卯 四五六 つ	寅丑子 七八九 つ	亥戌酉 四五六 つ	申未午 七八九 つ	巳辰卯 四五六 つ	寅丑子 七八九 つ	亥戌酉 四五六 つ
の	の	の	の	の	の	の	の
同	同	同	同	同	同	同	同
三十九分同	三十八分同	三十七分同	三十六分同	三十五分同	三十四分同	三十三分同	三十二分同



十三日		十四日	
宵	朝	宵	朝
亥戌西 四五六 つ	寅丑子 七八九 つ	亥戌西 四五六 つ	寅丑子 七八九 つ
の	の	の	の
同	同	同	同
四十八分同	四十九分同	五十二分同	五十三分同
	五十分同	五十一分同	五十四分同
		五十五分同	

(満月)

十五日		十六日	
宵	朝	宵	朝
亥戌西 四五六 つ	巳辰卯 四五六 つ	亥戌西 四五六 つ	巳辰卯 四五六 つ
の	の	の	の
同	同	同	同
五十六分同	五十七分同	五十九分同	二分同

六十分月様全く光明輝き給ひて満月と成り  
 給ふ六十はろつくちゆふんにて圓くと云ふ  
 も満ちると云ふも零といふも皆此親神様の  
 理より始りたるなり

始めて一分の光を虧け給ひて



	二十日			十九日		
朝	夜	宵	晝	朝	夜	晝
巳辰卯 四五六 つ	寅丑子 七八九 つ	亥戌酉 四五六 つ	申未午 七八九 つ	巳辰卯 四五六 つ	寅丑子 七八九 つ	申未午 七八九 つ
の	の	の	の	の	の	の
同	同	同	同	同	同	同
	十八分同	十七分同	十六分同	十五分同	十四分同	十三分同
					十二分同	十一分同

	十八日			十七日		
朝	夜	宵	晝	朝	夜	晝
巳辰卯 四五六 つ	寅丑子 七八九 つ	亥戌酉 四五六 つ	申未午 七八九 つ	巳辰卯 四五六 つ	寅丑子 七八九 つ	申未午 七八九 つ
の	の	の	の	の	の	の
同	同	同	同	同	同	同
	十分同	九分同	八分同	七分同	六分同	五分同
					四分同	三分同



廿一日夜	宵	晝	朝	廿二日夜	宵	晝	朝
子丑寅卯辰巳 七八九	戌酉 四五六	申未 七八九	巳辰卯 四五六	子丑寅卯辰巳 七八九	戌酉 四五六	申未 七八九	巳辰卯 四五六
の	の	の	の	の	の	の	の
同	同	同	同	同	同	同	同
十九分同	二十分同	二十一分同	二十二分同	二十三分同	二十四分同	二十五分同	二十六分同

廿四日夜	宵	晝	朝	廿三日夜	宵	晝	朝
子丑寅卯辰巳 七八九	戌酉 四五六	申未 七八九	巳辰卯 四五六	子丑寅卯辰巳 七八九	戌酉 四五六	申未 七八九	巳辰卯 四五六
の	の	の	の	の	の	の	の
同	同	三時にて	三時にて	同	同	同	同
三十三分同	三十二分同	三十一分光を虧け給ふ	三十分光を虧け給ひて半月と成給ふ	二十九分同	二十八分同	二十七分同	三十四分同



	廿八日				廿七日			
	朝	夜	宵	晝	朝	夜	宵	晝
	巳辰卯 四五六 つつ	寅丑子 七八九 つつ	亥戌酉 四五六 つつ	申未午 七八九 つつ	巳辰卯 四五六 つつ	寅丑子 七八九 つつ	亥戌酉 四五六 つつ	申未午 七八九 つつ
	の	の	の	の	の	の	の	の
	同	同	同	同	同	同	同	同

五十分同	四十九分同	四十八分同	四十七分同	四十六分同	四十五分同	四十四分同	四十三分同
------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

	廿六日				廿五日			
	朝	夜	宵	晝	朝	夜	宵	晝
	巳辰卯 四五六 つつ	寅丑子 七八九 つつ	亥戌酉 四五六 つつ	申未午 七八九 つつ	巳辰卯 四五六 つつ	寅丑子 七八九 つつ	亥戌酉 四五六 つつ	申未午 七八九 つつ
	の	の	の	の	の	の	の	の
	同	同	同	同	同	同	同	同

四十二分同	四十一分同	四十分同	三十九分同	三十八分同	三十七分同	三十六分同	三十五分同
-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------



廿九日夜	宵	晝	宵	朝	廿九日夜	宵	晝	宵	朝
子九つ 丑八つ 寅七つ	戌五つ 酉六つ 申七つ	午九つ 未八つ 申七つ	酉六つ 戌五つ 亥四つ	卯六つ 辰五つ 巳四つ	子九つ 丑八つ 寅七つ	戌五つ 酉六つ 申七つ	午九つ 未八つ 申七つ	酉六つ 戌五つ 亥四つ	卯六つ 辰五つ 巳四つ
の同	の同	の同	の同	の同	の同	の同	の同	の同	の同
五十三分同	五十二分同	五十四分同	五十五分同	五十四分同	五十三分同	五十二分同	五十四分同	五十五分同	五十四分同

三十日夜 寅九つ 卯八つ 辰七つ 巳六つ 午五つ 未四つ 申三つ 酉二つ 戌一分 亥同

五十九分同  
五十七分同  
五十六分同  
五十八分同

晝 未八つ 申七つ 酉六つ 戌五つ 亥四つ

五十九分同

宵 戌五つ 酉六つ 申七つ 未八つ 午九つ

六十分全く暗黒と成り給ふ

朔日子の刻より八日己の刻迄冬の理半月八日午の刻より十五日亥刻迄春の理十六日子の刻より二十三日巳の刻迄夏の理二十三日午刻より三十日亥刻迄秋の理八日上弦半月二十三日下弦半月朔日を新月と言ひ八日を半月と云十五日を満月と云ひ二十三日を半月と云ふ也。

朔日晦の譯

朔日と云ふは月様夜の九つ子刻より始めて宵の四つ亥刻の至りて四分の光明を放ち給ふを云ふ但し(一年四季の理なり)晦といふは月様全光悉皆黒くなり給ふて月籠りといふなり朔日といふは朝六つ卯刻より宵六つ酉刻を云ふ十五夜は宵六つ酉刻より朝六つ卯刻迄を云ふ。

月の出入の譯



朔日の月様は朝六つ卯刻に出給ひ宵六つ酉刻に入り給ふ  
 八日の月様は晝九つ午刻に出給ひ夜九つ子刻に入り給ふ  
 十五日の月様は宵六つ酉刻に出給ひ朝六つ卯刻に入り給ふ  
 廿三日の月様は夜九つ子刻に出給ひ晝九つ午刻に入り給ふ  
 朔日の晝と十五日の夜と表と裏なり八日の晝と二十三日の夜と表と裏なり。

朔日 新月 八日 上弦半月  
 十五夜 満月 廿三夜 下弦半月

●満潮干汐の譯

朔日十五日朝六つ宵六つ満潮 夜九つ晝九つ干潮なり  
 八日廿三夜夜九つ晝九つ満潮 朝六つ宵六つ干潮なり

しほとは四方の事四季の事此世は月様の御神禮北に頭を取り東より南西と四方くるりとし

める世界なり此御心味四王と云ふ四方と云ふ心を眞と云ふ眞を骨と云ふ骨は四方根と云も  
 同じ事此眞は神なり心なり其眞の氣が則ち味なり天地なり大海の潮汐は天地の息なり天地  
 の息には呼吸と云ふて一日一夜に二度宛づゝの息あり 則ち月息は潮満ち掛けて來る又日の  
 息には汐干くなり月息は是元素地に下りて潮緩み溢れて殖ゆる日の息は是元素地に上りて  
 汐沈すむ是れに依て満干するものなり此潮の差し引きには刻限四分宛づゝ違い日々有り  
 月様は此世界の王月體天地の自由用にて人間有り世界有りそれには萬物有る大海の潮汐の  
 満干も月の出に満上がり月の入るには同じく潮満上がる是れ月は萬物を司とる元にして人  
 間鳥畜類魚貝の類草木等に至る迄天の月様の養い下さる潮汐の味を世界へ潤わせ給ふ故に  
 大海の鹽水が引く也故に月の天井には必ず汐干となりて引く併して東西南北の違いに依り  
 満干の刻限少しは違ふ違ふ丈月の出入も遅き早きあり 則ち十五日の月の出は夕の六つ時に  
 て潮の満るも夕六つ時なり月天井は夜九つ時なり此時は全く潮干る底なり然れども世界の  
 廣き事なれば東洋と西洋との月の出入も時刻に違い有故満干も違有也 月の出入につれて



満干をするものなれば其所で月の天井には必ず潮干る也刻限の違ふは日々日の出の時が違ふ故也月日には夜晝同じ様に照し下さる故神の守護に違ひはなけれど例へば朝寅の七つに日の出る處と卯の六つに出る處と五つに出る處とある如く日の入も申の七つに入る處も六つに入る處の五つに入る處と有故潮満干も同じ又東西南北に依て少しは違ひ出来る世界の眞の地は元の子として神として一として天地世界の元也東とは日を貸すと云ふて人間萬物の温みを與へて照し下さるものなるが其處に依て方角も同じからず北と云ふ根は元故定まれば共東西南の三方は所々にて少々日に日の出も違ふ也月の出も同じ事矢張東より西へ入るなれど出入の刻限は違出来る也。

朔日は朝六つに出て暮六つに入らるゝが、一日に四分づゝ遅れて三日には朝五つ二分に出で、夕の五つ二分に入らるゝ故、夕方には糸目程の月を拜む。十五日迄刻限四分宛遅れて十六日より四分宛早まる故、元の朔日には朝の六つ時となる。月の三十日を月籠と云ふ。此四分と云ふは一刻の四分にて一刻は時計の二時間百二十分の四分四十八分宛なり。又月

は一日四分宛光を増して、十五日に六十分満月となるのは水を司さざる、月様は人間萬物生い育ちの守護下さる其萬物の飲む水也。此呑む水を一日より十五日迄天理の元素と共に月様が與へ下さる也。又十五日より三十日迄は萬物に水氣を與へる爲に元素を緩めて下さる也。月の光りは元素也。人間萬物此元素なくては一日も活きる事出来ん、此元素の水氣も何時迄も入れて置ても温度の違て腐る故、日々に四分の四季の運びに依て水を緩め巡り、又與へして守護下さる也。月は天の父親、日は天の母親萬物の親様也。月日の御守護なくば如何なる物も生を有する事出来ざる也。人間も母親の胎内へ宿し込日々々の理の増すも成長するも、草木の育つも、花咲くも實乗るも、味の付くも月日より水氣を與へたり暖めたり守護下さる故十用に育つなり。又月は萬物の元の父に物を引與へて下さる也日は萬物を育て下さる元の母也、月日は天地の夫婦南無と云も同じ事也、月日有て天地有天地有て夫婦有、夫婦有て人間有、人間有て萬物有、萬物有てそれの用をなす、されば月日の守護は高大無限の南無なり。人間はなむくと二人宛宿し込み下されたる故なむくと



と陽氣に暮す事也。大海の潮はなむくく何時も變らぬ働きあるは天地の息。波と云ふはなむと云ふも同じ理也。

しほみちしほ千の理

しとゆうのは四方の事四季の事しめる事をゆふ此世は國常立之尊御姿は大理王なり北に頭とり東より南西と四方をくるりとしめいるせかいなり。此神様の心の味をしほ(四王)とゆふ心をしんとゆふも又骨をしんとゆふも同じ事ほねとは四方の根とゆう事なり此世のしんは神もしん心もしん其しんの王は天地(あじ)なり大海のしほがみちたり又引ひたりするは天地のいきなり天地のいきは「二こうきゆとゆふて一夜一日に二度のいきなり、月いきにはしほみちかけてくる又日いきにはしほもひくなり其譯は月いきには此世の元素地に下り、しほゆるみてふえる日、いきには元素のぼりてしほち々むしほち々む時は地も宇くしほゆるも時は地しすむなり是に依て潮満ち潮干とする者なり此潮満干には刻限四分づゝ

の違ひ日々にはあり是は月の満かけと出入の理に委しく記す。

潮 汐

右は月の出  
左は月の入り

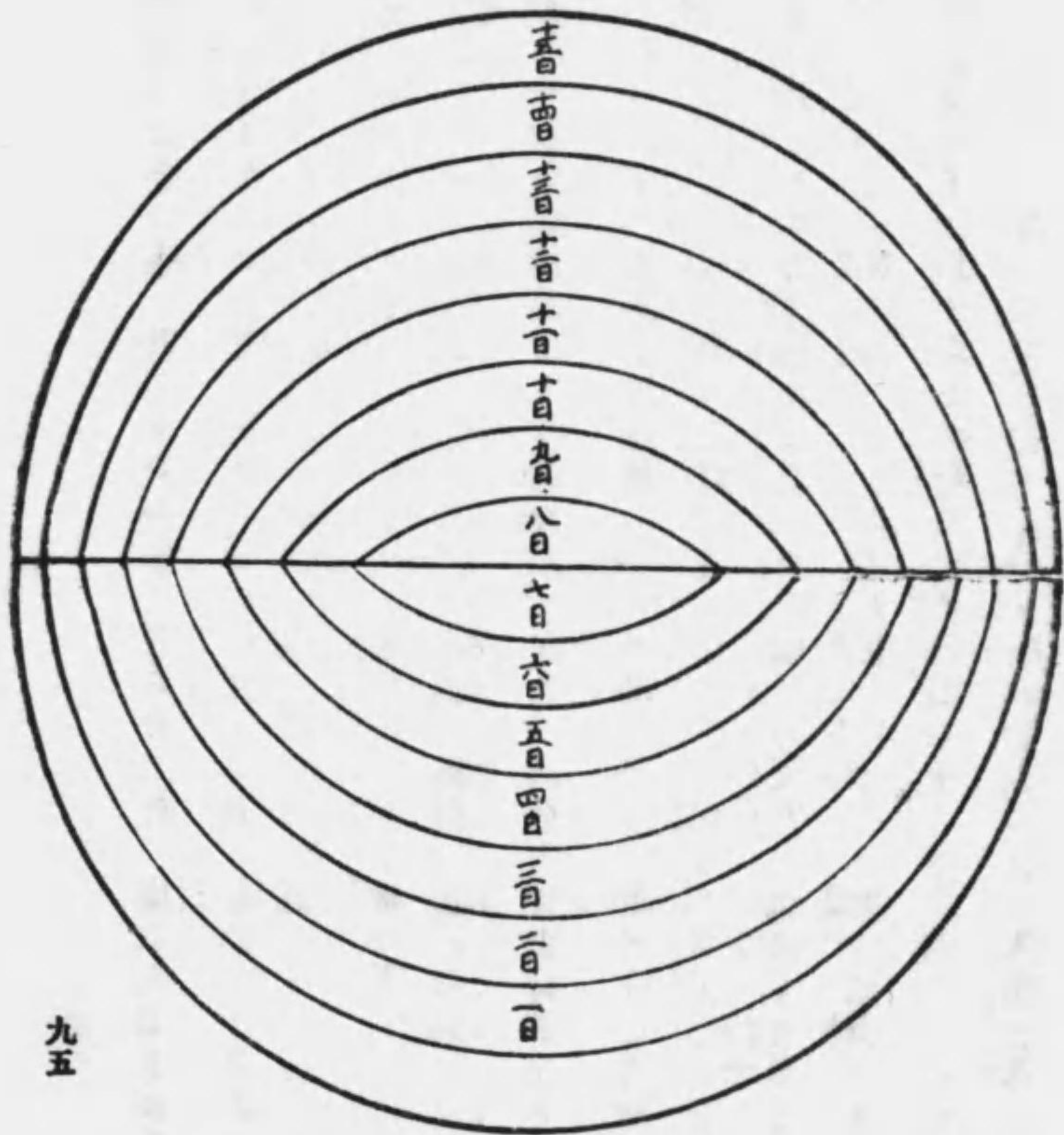
改 時 間

此時間の左右供  
月の天井なり

改 時 間

大潮 朔 十六日	朝六つ四分 夕六つ四分	前六時四十八分 後同	書九つ四分 夜同	前十二時四十八分 後同
大潮 二 十七日	朝六つ八分 夕同	前七時三十六分 後同	書九つ八分 夜同	前一時三十六分 後同
中潮 三 十八日	朝五つ二分 夕同	前八時二十四分 後同	書八つ二分 夜同	前二時二十四分 後同
中潮 四 十九日	朝五つ六分 夕同	前九時十二分 後同	書八つ六分 夜同	前三時十二分 後同
中潮 五 二十日	晝四つ時	前十時	晝七つ時	前四時
中潮 六 廿一日	晝四つ四分	前十時四十八分	晝七つ四分	前四時四十八分
小潮 七 廿二日	晝四つ八分 夜	前十一時三十六分 後	晝七つ八分 夜	前五時三十六分 後





十六日（くら）より三十日（くら）迄は左月（ひだりつき）の出右（みぎ）は日（ひ）の入（いり）なり。

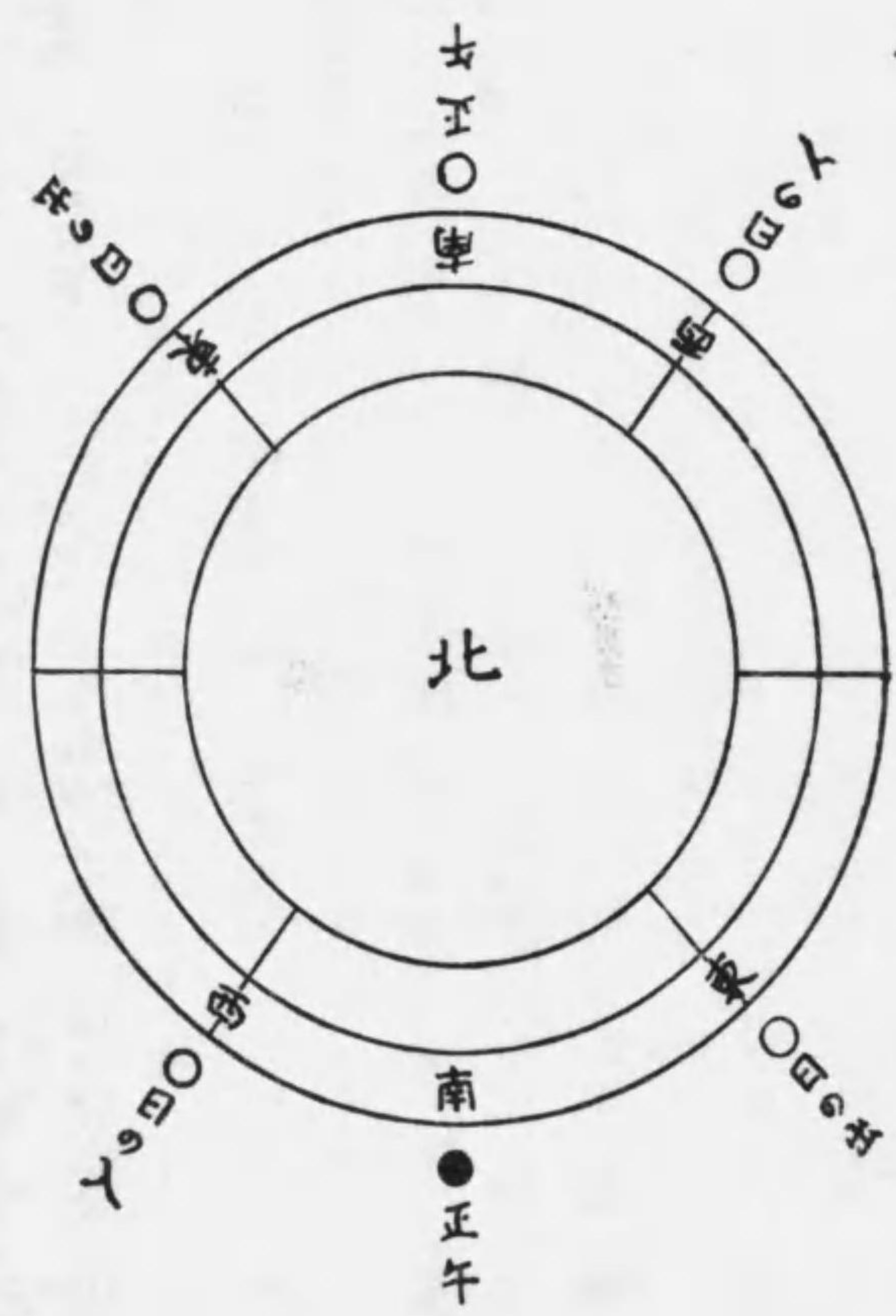
小潮 廿三日	夜 九つ二分	前 〇時二十四分	後 六つ二分	前 六時二十四分
小潮 廿四日	夜 九つ六分	前 一時十二分	後 六つ六分	前 七時十二分
小潮 廿五日	夜 八つ時	後 二時	朝 五つ時	後 八時
長潮 廿六日	夜 八つ四分	後 二時四十八分	朝 五つ四分	後 八時四十八分
長潮 廿七日	夜 八つ八分	後 三時四十六分	夕 五つ八分	後 九時四十六分
長潮 廿八日	夜 七つ二分	後 四時四十分	朝 四つ三分	後 十時四十分
大潮 廿九日	夜 七つ六分	後 五時十二分	夜 四つ六分	後 十一時十二分
大潮 三十日	夕 六つ時	後 六時	夜 九つ時	後 十二時



月は天の眼國常立の命様は此の世の王天一枚は月の體天の十用で人間ありそれ〴〵萬物も  
ある又大海の汐差引も此月の出のしほみちあがり又月の入には同じく汐みちあがるなり是  
れ月は萬物司る元にて人間も鳥畜類も草木に至る迄天の月様のやしなない下さる故汐の味  
を世界へうるをす故大海のしほにふくんでいる元素天に登り刻四季〴〵に汐ちどんでひる  
なり月天井には限らず汐かはくとなれども世界中同じ體月のはこびにつれて汐も干くもの  
なれば東西南北の違なり違ふだけ月の出入もおそき、はやき、とあるなり即ち十五日の月  
の出は夕の六つ時なり天井の月あるは夜九つ時此時は全く汐の干そこなり、なれど世界廣  
き事なれば東洋と西洋とは月の出入の時刻違ある故汐の満干も又違ひあるなり、なれど月  
の出入に連れて汐満干きする者なれば其所々では月の天井には必ず汐干くるなり。  
刻限の違ふは、日、日の出の時が違ふから刻限が違ふなり月日は夜も晝も同じ様な世を  
照し被下故神の守護は違はねど朝寅の七つに日の出る所と卯の六つに日の見る所と又辰の  
五つにあがりさす所との違あつて日の入るのも申の七つに日の入所と酉の六つにくらくな

る所と戌の四つに日の入る所と有故月の出入もそれ〴〵違ふなり故に汐の満干くも早きお  
そき違なり我國にて月の入るとき日の出と見へる所もあるゆへ是を世界のへんはとゆふ又東  
西南北も其理によりて違ふなり。  
是は世界のしん此を元とし子とし神とし一として天地世界のほん真中なり東とゆふは日を  
かすとゆふ事人間萬物にぬくみを與へて照す理で日がしと云ふ、皆其所によつて方角同じ  
からず其證據には今東の海より日の出を見て西の山へ入ように見ゆれども其西の山を越へ  
て西へ行く時は又一だん西と見たる山が東となつて又日の出の見る事あるなり北とゆふ  
根は定まれども東南西の三方は所々で日の出違ふものなり、又月の出も同じ事やはり東  
より西へむかい行れば出る刻限は違なり其理由は左に記す。





右の圖の如く北巳は元として根は替らねども日の回るに應じ東も西もくるうなり人間も背中は北左は東右は西前は南ゆへに一方見へても後見るん理は夜晝ある如く世界へんば此の如く晝でも夜の所あり、又夜でも日の所あり月も日も同じ事や十五の月はよる満なれば又うらはよる満月と成故いづくの所にも同じ満月を見る。

又三ヶ月も其の通り日も月もいづくに迄も守護の理はかわる事なし又月は一月目に同じ六つ時に出てくれ六つに入る故月を見る事なければとも四分づゝおくれ三日には朝の五つ二分に出て夕の五つ二分に入故夕方より糸目ほどの月を拜する事有、十五日迄刻限四分四分とおくれて十六日より四分くゝと早やまる故に元の一日は朝の六つ時と成月の三十日を月ごもりとゆふなり。

又月は一日六分六厘六毛づゝ理を増して十五日には十分の満月と成るのは水の司なる月は人間も畜鳥類も木竹草も月の守護でいきている皆人間にはのうすいあり木竹草にもものうすいあり、此のうすいを一日より十五日まで次第くゝに天理の元素と共に月がだいて守護



するなり又十六日より三十日まで萬物にのうすい入るため元素をゆるめるなり月の光りは元素なり人間でも草木でも此元素がなくては何にもならん故に月夜から木も竹も、のうがない故切て居ては虫が府く暗夜には木でも竹でも力十分ある故にいつ迄も虫もつかん、又海老や蟹でも月夜回りにはのうみすが少い暗夜には十分のう水あるあるは是證據なり此理いつまでも其天理の水きを入れて置ても、ぬくみの力でくさる故日々四分の四季の運びに依てのう水をだきしめたり、又あたゑたりして守護あるなり月は父親日は母親なり、月日は人間萬物の王なり此月日守護なくば世界を保ちいきをする事出来ん者なり、人間の胎内へ宿り込のも日々理の増のも生れ出るのも成人するのも、又草木のそだつも花の咲くのも色のつくのも味のつくのも此月様が水きをだいたりゆるめたり守護する故に如何なる十用も出来るなり月は萬物のも父なり、日は萬物育てる母也月日天地ふうふも無南と云ふのも同じ事月日あつて天地あり、天地あつて夫婦あり、夫婦あつて人間もあり、人間あつてそれく用をなす、されば月日の守護は廣大無限の南無なり人間もなむくと二人づ

宿し込だゆへ此世なむくと陽氣に暮す事なり、大海の汐もなむくとたゑす働きよふきあじをいつまでもかわらん理をなみ(波)とゆうなむとゆうのも同じ事なり。

●太陰 太陽

太陰 表鬼門 朝明星 金 神 天一 地六

太陽 裏鬼門 宵明星 破軍星

見る事は 月日 朝明星 宵明星

聞く事は 金神 破軍星 表鬼門 九曜星 (風之神)

月日朝明星、宵明星は東西南北でも四季でも辛故よく見える、人間も目は正面で耳は兩方に分てある如し、三十年人間一生六十年一代の理、夜の燈明は宵明星の理、朝の明星は供える水、晝夜の神様なり。

男のする事は引出す事は向ふの分らん事故、宵の明星が上がれば世界は暗くなる、例へば商賣でも何程引出すか儲けるか分らん事、百姓でも總べて男の働きは月様の方殖える方



故陰、女のする事は物をへらして行く方は分つて居る事故あかるい陽、故に朝明星が上れば世界が明かるうなる、例へば朝起れば燐寸がへる薪がへる、御飯炊けば米がへる、着物縫えば糸がへる、洗濯すれば石鹼がへると云ふ様な風で、日様は物をへらして下さる神故に女のする事は皆物を耗らす事ばかり、月様は物を殖やして下さる神故に夜は萬物が殖る、水にかければ皆ふえる、男のする事働く方は皆物をふやす事ばかり、皆此世は陰と陽月日で立つて行く日が暮せる。

人間身體にて東西南北は左が北、右が南、前が東、後ろが西、人間は東向になつてゐるもの、四季とは頭が冬、顔が夏、腹が春、背が秋、此の頭に付いたものが目耳顔に付いたものが鼻口腹に臍一の道具、背に手足合せて十二有つて十二ヶ月の理、臍は雲、讀尊と同一の理、腹の辛、腹は養ひの神、食物は天のじき物を身内に入れるから活きて居る、天地と身體との續きの道は臍、一の道具も飲食いの粕の出る處、皆三つで一季、口から這入つて腹を通り大小便に通ずる迄が春の理、秋は働きの神、背は立働く理、例へば手で仕事す

る背で負ねる、足で運ぶが如く、總べて働き引出の理、頭、顔、冬、夏は目耳鼻口、首より上は五倫心の働きのなり。

身體は一年の理、手足を使ふは一と月の理、心は一日の理なり、左は北、國常立尊、身内、左半身、總て左は一切男の理、右は南、面足尊右半身同じく右一切は女の理なり、御論にも左なれば男、一切に關係する理、又埃なれども目上も左なり、右は女一條なれど目下も右故に其人くにて見分る事必要是れが大切なり。

又左はさきさき右は是迄の事ども論す事有り、例へば右の通りに御座候、左様御承知下され度候といふが如し。

又裏と表と反對になる事等其人に當らねば分らんことあり、神様の身の内御守護處是れが御論しの臺なり、例へば月讀尊にそむかす仲が善かつたら足を煩ふ事は一つも入らん大戸邊尊の御心に副ひ理が合ふたら手を病ふ事一つもいらん、皆如斯、身内世界萬物萬事一切八社の神より無いのであるから、皆天地間は天理きちつとさまつてゐるもの故、此



の八社の道を止めて起る、論し方話し方は見分けと其人によりて違ふが元は一つ人間が分りにくいので説明がしにくいので一つ／＼多くに分けるなれど神様は一つ故、成程人間の左と言ふものは世界では北で有る、前は東である、世界で四季といふは身内では此處東西南北、坤、巽、乾、世界は八法身内は八方八社の神、世界で八方は身内では目耳鼻の道具、鼻口手足である、世界で五行木火土金水十幹十二支又人間で五倫五體と言ふものは身内では此處と云ふ、宇宙間一切の理、其の理を心に治めたのが天理を知つたのである。そこから悟りて論しが明かに分るのである。

天ははじまり地はろつくと云ふ也、天一地六日月有つて五穀成就、三千世界は四海兄弟天一地六南三北四西二東五是れは骸子の目の事であるが一の裏六二の裏五三の裏四、七が妻七は一切ひと切り七に刀、さいは晝の名妻晝は大食天尊の理、内の事を知る、夜寝る時は女房、國狹土尊の理、交合續ぎ、磁石のなき時元々は是れを使ふて東西南北の舟の方向を定めたものなり。又魔除にも使ふた。

月様ねいるといふ子根に入る、丑寅思切といふ、朝おきる(切る)めぐり目芽(切)卵うる  
 おい、めだし、めぐむ(芽出)(芽含)月日様の恵みを朝呑食ふ身が潤ふ、辰巳(巳)が立  
 (辰)ちて側くから續きが出来、午真晝まひる干たべる、へるも同じ、未申日様の辻風親  
 様の息なり。酉戌亥日様西に入る物を酉、亥、取入れる實が入る。

九曜星之譯

○日○月○火○水○木○金○土○計○斗○羅喉  
 人間第一慎むべきは日々口使  
 い方を考ふべき也、風の神五音呼吸吹き分け人を助けるか又治める時は月日也、それに反  
 して人を倒し痛める時は計、斗、羅喉星也、能く／＼慎むべきなり、火水木金土此五星は  
 人間日々天より借りて五行を使ふ如く、口にて普通的事に仕ふ言葉也。



人體之名稱

頭、顔、目、耳、鼻、口、頸、咽、喉、項、肩、胸、乳、鳩尾、腋、肋、腹、脇腹、臍、  
一之道具、背、腰、臀、竅、手、足、指、爪、皮、膚、眉、睫、髮、鬚、髭、鬚

頭之部

頂、顛、顛、(一二歳の時跳動する處)

顔之部

額、眉間、蜂谷、頰、頷。

目之部

瞳、眼、内眦、外眦、臉。

耳之部

耳輪、垂珠。

鼻之部

鼻梁、小鼻、人中、朝子。

口之部

唇、吻、舌、齒、齦、腭、頤。

手之部

肘、腕、掌、拳、手首、拳骨

足之部

腿、股、膝、脛、脛、腓、跗、踝、蹠、踵、湧泉、趾。

一之道具

男、陰莖、莖、龜頭、睪囊、睪丸、  
女、陰門、膺、腋。

指之部



巨指又捫指、示指又人差指、中指又高々指、紅差指又無名指、小指又こおや指。

一〇八

### ●交合交際之譯

世界にて土用といふは身體にては交合交際共にまじわる也。

#### 交合の譯

夜體横なる故、豎の女一道具を仕ふ則ち春秋の土用。

#### 交際の譯

畫體豎なる故に横なる口を使ふ、則ち冬夏の土用横と云ふはろつくにて水、縦と云ふは火、六は水四は火、人間眞實に交際するをにんげんと云ふ、男女眞實に交合するを夫婦と云ふ也。

冬の土用と夏の土用とが人間交際の理、春の土用と秋の土用とが夫婦交合の理、世界の土用と云ふのは人間身の内に取つては交合交際の理、土用の理に依つて皆萬物が殖える。

世界も身の内も土用と云ふものは冬至と夏至といふ、根が有つて出来る、秋春の彼岸は身の内では背と腹、冬至と夏至は身の内では頭と顔。

人間交際は大暑と大寒なり、其位骨の折れるもので交際は互に辛抱の仕合いをせねばならん、春秋の土用が一年に於て最も陽氣のよき時、夫婦も交合が最陽氣のよき事。

交合も交際も同じ理、自己の口から出て人の肉、爲めになる人の口から出て自己の爲めになる故に交際は丑、大食天尊耳未、惶根尊口耳と口と口とがなくては交際は出来ん、言葉の神四季の土用と土用が夫婦、冬至と夏至、彼岸と彼岸、大暑と大寒、冷氣と暖氣、皆陰陽夫婦の理也裏表也、土用は十五日かゝりの三日は辛の神の續きの理にて合せて十八日色情とは四季の情と云ふ事、四季の陽氣、陰陽交合にて萬物成育す、人間も男女陰陽同じ身の内が出来て一日が出来、一日が出来て一年が出来、一年が出来て一代が出来、四季六十年、一代は神の一年の理、人間一年が神の一日の理、土用が四季共に其真中故、温度正當の順氣なり、時候不順なれば米穀とても完全に成育せぬと同じ、人間も夫婦の心情



合あわざれば子こ供ども完全ぜんぜんに成せい育いせぬ、健けん全ぜんの者ものが生せいせぬ。

堅かたいと云いふ理りは皆みな月つき讀よ尊のみことなり、柔やわらかいと云いふ理りは皆みな國くに狹さつ土ち尊のみこと、堅かたきものは一切さい此この神かみの理り、柔やわらかき物もの一切さいは此この神かみの理り、堅かたい柔やわらかいと云いふ理りは一切さい夫よ婦ふ此この二かみ神かみの理りが元もと、故ゆに一方ほうが何なん程ほど堅かたくても一方ほうが柔やわらかかにあれば陸けつじく行ゆけるなり、又また柔じゆう堅けんの二し者者の時ときは柔じゆうが表おも也なり。

六むまじければ四あ合あよい天てん理りは皆みな十じゆうと云いふ世せ界かいなり、水みづは横よこに流ながれ火ひは縦たてに立たつもの十じゆう、人にん間げんも晝ひるは立たち働はたらく夜よるは臥ふす、横よこに寝ねたら水みづの理り、但たし夜よるでも光ひかりを點ひかりし仕し事ごと中ちゆうは晝ひるの理りに、晝ひるでも寝ねたら夜よるの理りに御ご守しゆ護ご被べ下くだ、家か屋やでも縦たてに使つかふ所ところの、立たつ柱はしらは皆みな月つき讀よ尊のみことの理り、桁けたどか梁はりどか横よこに使つかふ、續つぐものは皆みな國くに狹さつ土ち尊のみことの理り。

目め二につ耳みみ二につ有あつても一いつが聞きけぬ、手て足あし皆みな二につあれども左さ右ゆうに利きかん、皆みな夫よ婦ふの理りなれど一いの道どう具ぐ丈だけは男をとこに一いつ女をんなに一いつ宛むかしかない、二ふた人たり合あせて夫よ婦ふ。

男をとこ一いの道どう具ぐも平へい素そは國くに狹さつ土ち尊のみこと、女をんな一いの道どう具ぐにて親しん戚せきになる、世せ界かい中ちゆう續つがる、女をんな一いの道どう具ぐも晝ひるは大たい食しょく天てん尊のみこと、夜よる横よこになれば國くに狹さつ土ち尊のみこと。

世せ界かい中ちゆうの道どう具ぐは皆みな金かねと木きが一いの道どう具ぐである金かね、國くに狹さつ土ち尊のみこと、木き月つき讀よ尊のみこと、日ひつ月げつの一いの道どう具ぐ神かみ様さまなり、例たとへば汽き車しゃでも水みづを入れ火ひを燒やく、月つき日ひ親おや様さま木きと金かねで作つくつてある、蒸じゆう氣きは風かぜにて動うごく如ごとし。

人にん間げんは如ごとく何なんな智ち者しやでも水みづと火ひを拵こしらへる事ことは出で來きぬと同おなじ、天てん地ち間かんの萬ばん物ぶつは皆みな水みづ靈れい火くわい靈れい親おや様さまが入いり込こんで神かみの作つくりたまふ、人にん間げんは是これを扱あつこう者もの使つかわして下くださる使つかふたために守しゆ護ご被べ下くだ也なり。

●陽氣本元の理

膽たん眼がん勇いさむ心しん臟ぞう鼻び安やすんす肺はい口くち喜よろこぶ肝かん耳みみ樂たのむ勇いさむ安やすんす喜よろこぶ樂たのむ此このの四よつ一いつが、よおき心こ陽やう氣きとは心しん臟ぞう安やすんす、肺はいは喜よろこぶ膽たんは勇いさむ肝かんは樂たのむ此このの四よつに腎じん臟ぞうを入れて五ご臟ぞうと云いふ、腎じん臟ぞうは夫よ婦ふ交こう合ごうの時とき情じゆうを發はつする源みなもとなり、情じゆうを催もよほす時ときの心こころを志しと云いふ、行おこなふて仕しとなる、仕しはしにて仕しると云いふ仕しは四あ合あせなり、首くびより上うへにては目め耳みみ鼻び口くち首くびより下したにては手て足あし臍へそ一いの道どう



具四つ合ふ也。志は嬉しと云ふ心なり、心臓は即ち心、肺は思ふ膽は意、肝は慮り虎は虎なり、七なり七は切るなり故に堪忍はたえしのぶ、忍ぶは及に心、及は虎に同じ理なり慮は忍と云ふも同じ意味なり。

天地親様の陽氣に合はぬと云ふは人間の慾が深い故也、足る事を不知足納の理が治まらぬ故なり、皆埃にて心身を害する、神が早く陽氣になりてこいと仰有るのは、陽氣は神の心誠を云ふ足納は是十分と云理也と仰らる不自由を十分と足納するは心の道この道通り何も十分になる。

●五 臟 の 譯

膽臓は月様目に通じ心臓は日様鼻に通じ肺臓は惶根様口に通じ、肝臓は大食天様耳に通じ腎臓は月讀様、國狭土様皆裏表なり、膽は意、見るは表、意見、心臓は即ち心、肺は思ふ、肝は慮る、音響の耳より肝に入る、目の醒るも肝が一番先き眠るも先き算術者の達者なるは肝が一番の働き、勤考、勤忍、肝の病は大食天、慾から起る疝の下には及有り、

疝が起つたらあぶない、腎臓は男女交合の時梅の木と同じ理にて夫婦一つに成つた理、人間を造る源なり、嬉しい口二つは男女、膽から胃が生ずる。

心臓 肝 肺 此四つが心、此の四つが一つに働いて心、此連絡は神の働き也。

心は月日と惶根大食天、冬夏夜晝の理、腎の時は春秋の理より、春秋の土用最も陽氣のよき時季なり。男の臍大戸邊尊、女の臍雲讀尊、男の方は秋彼岸勢氣下がる理、女は春彼岸勢氣上る理、男一の道具秋土用、女一の道具春土用、首より上夏冬、首より下に秋春有り。物が恐ろしうて心細くくなるのは膽臓が弱つて居る物が案じられて心配でならんこと云ふは心臓が弱つている、膽は月様、膽の小さい者は月様の御心に副わぬ、膽は月様の御心に副ふ丈け太くなる、借物と云ふ事が分つて心が落付いたら太る、心臓は安心すれば丈夫になる、心太ると云は神様の道を段々納めて安心が出来たら膽が据わるから太る、月日夫婦の理、膽が一番の元なれども世上人間は心が弱つて居る故に安心によりて心太らせ



ねば膽が養えん、夫れが元となつて樂しむ心も喜ぶ心も出来る、喜ぶから樂み、樂しむから喜ぶ。夫婦物を知りて安心する丈け膽が据わるから心が太る、八埃が五臓の働き即ち神を無にする、五臓を腐らす心也。

人間は此の働き自由用が叶ふから使い過ぎて迫る、又徳を積めば如何程でも徳は積める心の使ひ方にて大なる相違となる故に御言葉に善惡二つの理は助かる道と死ぬる道と落つる道と上る道との理の區域をよく間違のなきやうにと仰せらる、樂み勇む、安心喜ぶの四つが胸四つを養ふ心、此四つの心が信神信心といふ事なり、勇む心は膽の養い勇むは勇氣と云ふ膽玉の小さき者は勇む心なし、我身も喜ぶ人にも喜ばす心を使ふて居たら肺は痛まぬ、我身安心人に安心させる心なら心臓は痛まぬ、夫れに嬉しいと云ふ心が腎臓を養ふ人間は日々心の不足、嬉こべんのが天の理には一番重い、迫まる人間上では左程にも思へぬから咎める事も出来ぬが天の親神には之れが不孝の第一、肺は思ふ我れも喜ぶ人も喜ばすには六くな心でなくてはならん故田の心と書く世界にて田は六くなもの、人體目ほど

六くなものはなし水なり誠なり六くは六物六臺惶根様誠なり、喜ぶといふ心が天理に叶ふ第一なり喜べんといふ心は慾が深いから如何ほど結構でも結構と思えぬ不足から起る、自分も安心せずして人に安心させよと云ふても向ふへ寫らんから道が付かぬ如し、自分が嬉しい心なくては人に寫らん匂ひが掛らん、嬉し樂もしと云ふ心に花が咲く、其薫ばしき匂を人に寫すが匂掛となる、自然と人の心が寫るなり、皆八埃から心が小さくなつて神魂の徳を失ふ。

又學問すればする丈け物事を覺える丈け一つ學べは習ふた丈心が廣く太る、屋敷を廣めるも同じ事、我が心の範圍を廣くする、感心は心の養ひと云ふ、苦勞した丈け心が作れる小さい心では神の器には成れん、世界中の事を計り世界中の事を皆な知てこそ神の道具である、又勇氣なく膽玉小さきは心に眞實無き理なり、例へば昔の武士はまさかちがえは命を惜まんと云ふ度胸有つて膽が据つた如く一身を捧げて成すと云ふ眞實なれば太し。心を作る事心を大きくする道を知らねば道は何年暮れても役に立たぬ是れが天理の第一なり











氣は長く心は廣く勤めは堅く氣は長く云は堪忍を旨とし何事にも痼疾痼癢を出さず、又何事に懸りても捲まざるを云ふ、心廣くと云ふは何事にも心を動せず先き案じをせざるを云ふ也、勤めと云ふは言行一致の事なり。

玉は月様、鏡は日様、劍は風、惶根尊、大食天尊、及物で有つて切分空氣は惶根尊の御働にて月日の息風となる言葉は月日の賜物 陽氣也。

正直から情けが出る慈悲と堪忍と三つが誠(眞事)なり、誠は神也誠より尊き心なし。

水火風是れより上の寶は此世にない是が人間萬物の命なり、人間の肉體を始とし一切動物の肉體宇宙の萬體は悉く此水土温熱風にて産み出され此世に生命を有し、活動をなす神が命なり、故に神様を尊、命と云ふ。

月様の刻限は何千年立つても一つも變らぬのが正直、其の分心が人間故正直でなくてはならぬ、八日なれば半月半月なれば半分しか御光りがない御照ない、是程正直はない、其理が皆身の内に有るのだから大きくても月様小さくても月様、眞直は正直、正直正しいは神

天理は明かす仰下さる故に水程正直なるものはない水程ろつくなものはない、人體にては

目程六つくなものはない一寸の曲みでも見分ける如く、水はろつくなものはない、人體にては

此世は曲直を分ける事が出来る、例へば建築地の高低を分るに水盛り定規、皆水が正直の元、此世は水が元水が臺にて立行く治まる水は宇宙の萬象を現はす元素にして千變萬能萬體の徳を出す根元なれば 即人間萬物の本家親玉也。

水程低いものはない水は月様の御心、下が可愛く下を下を流れ巡つて萬物に入込

巡環して萬物を養ひ下さる此大徳が親心也、情け也、水は宇宙間切れ目無く隔て無く萬物を養ひ續ぎ育てる徳が情けなり、故に水程力有るものはない、例へば何萬噸の軍艦も水があれば浮ぶが如し、所謂方圓の器に従ひて萬能の効用 働を成すの大徳を例へば人間親は我子を養育する情の 心味いと同一。

此世は水の世界萬物は水土より生じ水氣入込んで生成化育をなす水は萬物の元、身體は月様の清水の固りである水は心なり故に正直でなくてはならぬ、此世治まるは月様の心人



間に取りては情又足納が正直、足納は治まる水の理、治める心、足納と云ふ理が明か心の澄む理也、清水誠の第一也、足納の理が治らぬ故八埃を生ず。

情けは水月、慈悲は日火なり温みなり、日様の暖み照光下さつて萬物が育つ、火水一體なり此の和合によりて風生ず、水氣に火氣が合ふて明かとなる、月日は萬物の親なり根本也、火と水とが一の神風より外に神はなし、情けは陰、慈悲は陽、水氣有て火の靈働き火氣有て水の靈働く、温みが無くては萬物は一日も此世に活きる事出来ん水には必ず温み和合下さつて一切萬物に入込下さるで生を保ち同じく照光有て皆育つ火の燃ゆる日の照る光り一切點する此の陽徳が無くば世界は暗黒嚴寒で何も出来ざる也、萬物の生ずる悉く水氣に温御副下さつて生ずる育つ粒毛、草木も温みを入れて下さるで芽切る生へ出る成長し花咲き實乗る、日様温み有て衣食住萬物が此世に現われ其用を成し人間始め生物立働く自由用が叶ふ身内の温み世界の温みは悉く日様貸し下さる賜物萬物に御心入込み玉ふ、是程慈悲のものはない、道と云ふは水と火といふ事此二つが満ちて居る故道といふ身

の内と云ふ道と云ふ此身の内が道なり、道とは身體に習ふて行わねばならん、身と云ふ鏡といふ八形と云ふも八たの鏡と云ふも同じ事にて人間身上は前世より今日迄の心の鏡として心通り身に現はし貸し與へ下さる心の形なり故に身に現われる理が論なり、身の内が神宇宙も同じ神の誠で立つ身上有て幸福圓滿に世界立榮える道が誠。

神言 身上有つて樂み身上有つての道である是よう聞分けてくれと仰せ下さる。

ばつと腹立たのを其儘風に出さずに堪忍してごんな事でも分かる様々に説いて聞かす人の満足の行くやうに聞かす人に満足與える、善き方々と優しく物の治まる様々の風を吹かす言葉が堪忍の風、惶根尊の智慧なり、劍は大食天尊、惶根尊言葉、口辯舌、賢いといふは人の心中道理の見分かみ分のよく出来る皆則切分故に惶根尊の裏は大食天尊（丑寅の未申）見分開分の神交際義理の神様、智慧は四季の理に取れば日様惶根様誠が現れ慈悲心氣を長くして人に満足與える風が智慧。

併して言葉は心が現れるもの故物が惜しいや欲いで慾が深いやうでは人の助かる人に満



足與える眞實の言葉が出ん木葉も根より水氣入込み温味が入りて芽が出る芽は葉なり口葉も同一の理で現れるなり。

誠は四季の理に分ければ冬夜月様大食天様、情けと思切りの理、例へば人を助けるにも人様に志し心盡すにも情けを施すにも思ひ切らねば出来ぬ如く我家我身慾を思ひ切れぬやうでは社會の爲めに働けぬが如し。

其の眞實は誠か無くては出んなり、誠の心陽に現れ、或は人を助ける食物與えるとか世話をするとか金銭物を施すとか實行して其の誠の現れたものを實と云ふ眞實なり、心に誠有つても行わざれば見えん行ふたものが即ち實、例へば人間夫婦の間に子の生れたのが實、柿の木は甘き柿の實を結ぶ溢る柿は溢る味の實が現れる、甘き木の誠が現れて甘柿となる如し、木の實も實も同じ、親神様の誠が宇宙萬物に現れて衣食住其他總べての物を身に受け見聞して陽氣に暮す皆親様の實を頂いて生きて居る人間也、是が神様の眞實誠人間も同じ助けよと思ふ心は、誠、誠は無形現われて實、慾の無きものは誠、親が我子を

思ふて我れを忘れ慾を忘れ眞心盡して育てる慈悲此心が眞實誠也。

勘忍と素直と同一理となる素直は神の心、水の心、人間誠といふは足納が第一足納は此世の大王も足納大き木も仰せられてある、心澄む心の掃除するには足納、足納は此世の治まる理、水の心なり四季に理を分れば誠は冬、智は夏、春は續ぎ秋は力と立てるなれど八方の神様の御心が一つに纏り下されたものが即ち誠、月日の御心なり。

優しき心と云ふは誠にて(此世は八方八柱の神)此八柱神の心に協ふ心に定めるが世界の式なり此心を優しと云ふ也。

正直慈悲堪忍三つは人間暖み水氣息一日も無くて立ぬと同じく是より實はない、堪忍は物のよく分りた賢い人から堪忍をする寛仁大度慈悲心を以て敵と味力にする如き古今の例話もある如く、誠程尊きものはなく誠程人を感化するものはない、誠には刃も立す矢も立す水に溺れず火にも焼けずといふ。

宇宙間は悉く神の誠の現れ故本書中だんく述ぶる處は借物の理を了解せんとするも



の皆誠の一つに止まる故此誠と云ふ理は何程にても話し盡せぬものなり。

神言 誠といふ理の働さへあれば天の親よりも實があるで實と云ふは分かるうまい、火水風といふ此恩理か分れば一切の恩理が知れる是れ知れば衣食住の三點は水火風の賜物といふ理が知れる此の理が分れば神の守護といふ理が知れる此の理が治まれば神の誠といふ理が明かに知れるなれど教えの理を取違はるといふは是迄の心の理が忘れられんから目に見えたものに惜みをかけて身上の大敵といふ事を知らず欲しい心の理が離れられんから、眞實といふ理が治まらん、早く思案をしてくれ世上の難はごういふ處から身に受けるは八つのケ條は何と思ふて論してゐる。

又神の守護といふ理が心に分つた事なれば道の理は容易ならぬ重い理なれど深い樂みの理を與ふるには日々めい々の心の勤め方の理によつて與ふる理と與へられん理とあるから取違ひの無きやうに勤めにやならん、我身の助かると云は、人の爲なら我身据てゝもと云ふ精神を以て人を助けにやならん、人に手柄をして貰わにやならん、人に喜んで貰わに

やならん、と云ふ心で日々勤めて人の心を助け自分も喜び日々勤むる理は高も値内も分らん容易ならん理であるとの仰、又御道は話一條で助け下さる其話は月日の眞實、是を取次ぐ者は月日の代理である神様の御言葉は人間が考へたり作つた事でないから、正直に取次がねばならん、我々人間が智慧高慢を交せて我身慾から我身の用害や我身例へば此話をしては人が如何に感ずるから氣に入らぬからと云ふ風にて取次ぐにひかゝるとか上手口とか遠慮氣兼して居ては人が助らぬ故、神に對して高慢となる、神の御言葉は正直に取次ぐ神に素直になくては誠とは云へぬ我身をたくは慾。

又人間の俗に云ふ硬いと云ふ心は一時強いやうなれども慾といふものゝために決斷力が乏しく心が變る崩れる硬いものがやらかい中途で挫ける眞實定めた心は立抜く挫けぬ變らん迷わんくるわんど云ふのが誠、眞實の定つた心を日本魂とも云ふ。たとへば彈丸は出かけは強いが先きに行くど布に包まれる矢は出かけは弱い手の利いた者はつかむといふ先きに行く程烈しく強くなると云ふたとへの如し。



神言 自由用と云ふ理は何處に有るとは思ふなよ、只めんく精神一つの理に有る日々  
と云ふ常と云ふ日々常に誠一つといふ、誠の心と云へば一寸には弱いやうに皆思ふなれど  
誠より堅き長きものはない誠一つが天の理。又人を助ける心は眞の誠と仰せ下さる。

●勤の譯

つこめ、切留着物なれば裁ち縫い普請なれば木を伐りて用材に使用するを云ふなり、夫  
故に人間言行一致せざるは反物を裁ちて縫ざる如く木を伐つて普請用材に使用せざるも同  
様にて皆無駄事となる也。

月日様元々泥海中より人間御造化のため永々御苦勞下され又人間を作るために此世界を  
開闢せしものと仰せらる、其容易ならざる御苦勞によりて今日人間萬物生々として立榮に  
て居るものなり。苦勞が此世の元なり寶なり、神は日夜一刻も御休みなく御働下され宇  
宙萬物は皆人間の爲めに造られてあるゆへに諸動物はつまり人間のために成りて働いてい

る、徳とは十苦と云ふ事なり、十柱の神様の御苦勞下されて在る理が徳、故に苦勞と云ふ  
事程結構なる事は此世界に無い、而して人間では理に叶ふた苦勞でなくては何にもならぬ  
が苦勞といふ理が働かねば萬事出来上らぬ、神様は靈妙不可思議なる御徳にて陰より御苦  
勞下さる故、世界萬事が成り立つ、人間始め一切は我れの方で生れ出て生きて居るのでな  
い、神の力なり、胎内に宿仕込むのも月日なり、生れ出すのも月日世話どり、此大恩を報  
ゆるには人間、他に報ゆる事なし、只互々に人を助ける人の爲め互に勤むる是より外にな  
い、神の分心たる人間なれば天の理に副ひ、人として此の世に出たる勤め、物事勤めるこ  
と云ふ理が無くては切れる、天の理に切れる、つとは切れる理、大食天尊とめるは續ぎ、  
國狹土尊 此世は日々一切萬物が切れたものが續がり又切れて續がりて此世の用をなす  
人間も此の世の縁を切られたれば活きられぬ、勤むる理で留るといふ。  
苦勞と云ふ理より尊い事はない、苦勞の理より徳は出来ぬ、人間も御苦勞様といふ事程  
結構な尊重すべき事はないのである。



御教祖の御苦勞の御徳に依つて御道が初まる、皆是と同一、誠が無くては人と切れる、神に切れる理となる、心勤めて神に續がる、神様には心一つより勤めるものは無い、有形の物は世界萬物神のものなり、人間の物は心一つよりない、神の道は胸三寸心の道、心の内に仕事が無くてはならん、心の働きあつて形に現われ神に近づく親心を以て一列に隔てなく人を育てる、人に満足さすと云ふのが親様の御道である、互助け合立合は人間の勤め其人を助けた世の中に勤めし効能の理によつて天理より我身に徳を授け下さるなり、此世は萬物皆助け合立合にて立つ世界故互に人に満足與えるといふ心は最も美しき心にて神の心なり、人間社會は天の親様即ち天理に對する勤め、功能の有無により多少によりて神は徳を授け玉ふ、一人限り働いた勤めた丈の價は神より其身に與へ給ふもの故、たとへば他の人に損害迷惑をかけ、或は人を害して我れに利益を得る、天理を害し社會に功なき働きをなしてたとへ我身に利益をなすことも人間上にては利益を得た様なれども天の理より見れば徳を授かる事出來ぬ埃ゆへ皆辛働が無駄事となり且人を害せし罪は我れに戻り我身

の天徳を缺き際儀不自由、病氣災難の道を作る、故に人間は日々心の理、勤め働く理により徳を積むものと日々徳を落しつゝあるものとあるものとのある。

例へば一日に一圓の價値ある働きをなし一圓五十錢の價、日當を取り又は一圓五十錢を衣食住に費し我身に付るとすれば五十錢は天理を食い込んで行く理となる、前世の徳を削つて行く、又一圓五十錢價値ある働きをなして一圓の物を我身に付けて儉約し足納なして行けば五十錢の理は天理、社會に勤める我身に陰徳を積んで行く理、併して人間は萬物の靈長故心の働きの身の働きのより大きい、同じ身體を使ふて働いて一日に五十錢の日當を貰へぬ者と五圓六圓にも當る人と有る如く、心の働きの前々の徳、其價値を有する故なり、若し心の働きの無くして物事の目先も利かず只々五體を働く丈の者であれば働きの功能は小なり、又日々に人の恩を着て我れが勤むる理なくして過分の驕奢、我身に付け過ぎ天恩に盡されば身の徳が保てぬ、神は昔より色々助ける道を拵へて恩の報じ道、報じ場を作りて心魂が畜性道に落ちぬやう導き下されたものなり。



神言 神々のおがみ祈禱や占いや是れ人間の恩の報じ場。

だんくと思が重なる、其の上は牛馬と見ゆる道があるなり。

神は人間を屋形として御心入込んで世界の陽氣を楽しみ下さる思召故に人間は病、難儀不自由して苦悶すべき筈で造化下されたものでない、八方の神様一つとなつて此世界が造られ萬物一切は相互、助合の理によりて生命を保つ所謂生成化育して此世が立行、人間も互助合ひ、靠れ合ひて立つて居る、男一人女一人でも立ぬが如く人間一人くんに單獨の生活をなし得べきものでない、必ず相寄り相扶けて生存の目的が達せられるものである。

宇宙全體は神の一體、人間は其一小分身であり、其個人が集りて所謂團體を形成し社会的共同生活によつて存在し又進歩を見らるゝものである、互助合は神の心、天地の理法にして即人間の勤めなり、若し此助合の精神が無いとすれば逆も人生の目的は達し得られないもの也。

神言 我身立つよう、我身一人先へ助かり度いと云ふ心の理は世界の理で有るなれど自

分の甘い事にしようと思へば其場のよき事はかりするなれど理からみれば天の理では甘い事にならん、人を倒さうと云ふ心あれば我身が倒れるが理、人を掛けよう云ふ心なれば我身が掛る、人に損を掛けたら我身損せにやならん事が出来て来るのが理、人を助けたら我身が助かる、人を立てたら我身が立つと仰被下、宇宙間萬物は皆それぐの役目を勤めそれぐの働き、それぐの用をなすは皆人間の爲めに成つて有る、人間もそれぐの家業應分に働いている、之れは一人一名の此の世に出たる勤めなり、人間の勤めは神の働きと同じ故眞の代理なり、皆神様と同じ事をして居るのが人間である。

食物拵へ川井戸の水はかわいと云ふて雲讀尊飲食出入、例へば小供に乳を飲ます、大小便此世話をする婦人は皆雲讀尊と同じ事して居る、東朝明星養いの神様、又鍛鎌等を携へるとか總べて働きに出る、引出すは男の理で大戸邊尊、西宵明星働き引出の神様皆男女陰陽の理なり。

神様陰陽御夫婦の理は何事にも御副ひ下さる、月様には日様、水には必ず温みが副ひて



流れ、火には水氣が副ひて光り、燃える。目は月様なるが日様が副ふて見える、物を云ふ聞く時は言葉は惶根尊なれども大食天尊が副ふて切り下さらねば物云ねと同じく、月讀尊御働きの時は裏に國狹土尊が廻りて御働き下さる、人間も男一人女一人で子の出来ぬと同じ、雲讀尊御守護の時は裏に大戸邊尊が廻つて御守護下さる、大戸邊尊御働きの時には裏に雲讀尊が廻りて御働き下さる、皆人間のする事は一つもない、神様なり男神は男に入込み下され女神は女に入込み下され世界も身の内も同一の守護下さる、皆人間の自由用が神の自由用働きである、人間が寄りて社會といふ、人間は神の社なり、男見れば男神、女見れば女神と思へど仰せらる、何んでも人を神と思ふ、皆社會の人は是れ神なり此心にならねば眞の敬神といふ、眞の尊王といふ事に成らぬ、そこから眞の愛國といふものが起るなり。

神言 口と心と行いと三つ違わぬやうに日々守らねばならん、何事も胸と口とが違ふては神の心に是れは叶わん、誠となれば胸と口とが違ひさうな事はない、なれど口と心と違ふと云ふはいがみ、かがみがあるから違ふのである、眞實が神の心に叶わねば如何程心盡したることも自分の心には眞實と思ふて盡し運んで居りても理の取違ひ、通り間違ひ有れば心丈の理通りた丈の理が現れるから通り違ひはすまい、通り違ひ有つてはならん、汚ければかり如何程誰れに相談しても叶わぬ月日退ぞく、と仰せられて有る也。

●言葉の大切なる心得可き根元の理

善に仕へば月日なり、惡に仕へば計斗羅喉なり善き詞にて國を治め人を助く惡き言葉にて國を亂し人を倒し我身を倒す恐るべし慎むべし。和歌五音七律なり是從成りたる倭言葉なり、元本天神教の被下たるなり、木火土金水の五つ此五つに月日にて七律日月火水金土人間口程充滿成物はなし、心を眞に改め陰徳を積みたる人の言葉は風に草木の靡くと同じ事なり、尊き人の言葉にて人心柔らぎ惡人も善人となり邪を正と改め國亂を平治し衆民太平を謠ひ歡喜を唱ふは最初眞實の風即ち言葉口なり言葉は口で陽なり、心は奥なり陰なり



り言葉の元は五音なり、あやちは六物六臺なり、六臺とは惶根尊也。

神様の御話しをなし又御諭しをなす時總べて誠から出た言葉は月日の代理である、徳を積んだ人の息程人が動く、又 天皇陛下より下し給ふ御詔勅、教祖の御言葉は皆神様の御言葉也、此の世は言葉の理で治まる世界である。

又賢いと云ふは言葉にて人を満足する様得心の出来る様、治まるやう舌一枚の動かし方にて風を吹かして行く事、風の吹かし加減に依つて人間は人に不足腹立さす事も喜ばす事も出来る、此言葉は心の根より出る、木の葉でも幹から出る如く心に誠が無くては人が助かり、満足與ゐる事が出来る、其眞實の言葉が出ぬ。

情けと慈悲から云ふた事はどうしても人が有難いと感ずるやうになる、たとへ一時は腹立反對することも後には頭を下げ従ふ事になる、情けと慈悲の心でさへあればどんな事にも勝てん、此二つは月日であるから月日の代理である、月日様に勝つ事は出来ない、此世は誠さへ有れば神が守護あるにより結構に通れる、誠の無いものは通れぬ、御道一條は尙更

の事、此世は月日の誠眞實と云ふ實の世なり、人間は神様元々長らくの御苦勞下さつて五音の吹分出来る、同じく開分が出来る故、如何なる事も自由用に言葉を以て通じ陽氣に勇み面白く世を渡る事が出来る、物が云へず開分出来ねば獸類の如きなり。

言葉の理、働きて如何なる徳も積む事が出来又如何なる害毒をも及ぼす事もできる。他の動物は一音か二音丈けが云へんのである、神の大恩を知らずして強慾悪氣の心を以て人を倒し人心を害する風は神の理として守護出来ぬ理を生ず、其理に迫れば物の云える身を借れん。又畜性にでも落ちねばならん理が出来る。

言葉は六く誠の神様の御働きなり、言葉の理にて世の中の人を助ける徳を有する人は勿論、或は美聲を有して人に樂み喜ばしむる徳は皆天の理に叶ふた心の理有る也。又徳が無ければ人が聞かね用いぬ、徳を積んだ人の言ふ事は人の爲めになる、誠のない心から出る息は害をなす、暴風にて物を倒し害をなすと同じ。



●五音之元本

五倫五體	い	ろ	は	せ	す				
月	キ	オ	ア	エ	ウ				
日	シ	コ	カ	ケ	ク				
破軍星	ニ	ト	タ	ネ	ツ				ンは六に
朝明星	ヒ	ノ	ナ	ヘ	ヌ				て心なり
五柱	リ	モ	ヤ	メ	フ				吹分被下
神也		ヲ	ワ	エ	ル				也
	土	火	金	木	水				

いは水で月様、ろは火で日様はは續ぎ國狹土様、せは勢せいと云ふて月讀様、すは雲讀様  
んは惶根様、六くと云ふて心である、んは五音の本ではない、是れが五音にて皆な戻る、

十二音づ、四つ四十八文字、一日が出来て一ヶ月が出来、一月が出来て一年、一年が出来て一代が出来、四つの理、五柱と惶根様なるが月様には必ず日様が御副なり、月讀様には國狹土様、雲讀様には大戸邊様、惶根様には必ず大食天様、故に八方の神となるなり。  
木火土金水、喉、舌、齒、唇、齶、身の内の方と字の理から説く方とあり、身の内から説く四十八文字は皆身の内に有り、又世界で説くのは空海上人が一つの歌に綴られ佛法の經文に象りたるが、文字はそれより以前から有つたもの。

親神様の教は言葉に理が有るのは言葉が先きに出て文字が後に出来た故、天地開闢以來幾千年の間に人間に萬事の事を仕込下されて天理から名がつき言葉が出来て居る故に言葉が元なり、名に理が有る、言葉に理が有る也。文字は種々様々の品を分ける爲めのも故、言葉は理があつて、言葉あり、言葉あつて文字あり、佛敎が一の枝、文字が二の枝と仰せられた、故に世界に昔から云ふて居る事の理が天の理から出て居る、名もついて居る、神様も云ふていれども元知らぬと仰せなり。



世上で云ふとか、諺に云ふのも歌に諺ふのも皆神が云わすのや、歌わすのや、歌の流行するのでも世上は歌で知る、又夢を見るのも月日なりと仰せらる。

例へば病人の論しでも其人の云ふ言葉の理を分ける、神が云わすと仰せらる、言葉一切天理をはずれては云へん、無きもの故(又病む時は言葉がなまる)云ふ事となり、ふりに現るゝ處で皆見分けるなり。

●(衣食住)

●機の理

身體に纏を衣と云ふ、又着物と云ふ、衣の元を反物と云ふ、之の元を機と云ふ、はたごは織物なり一機四端は一年四季の理、一端一季の理、一端三丈は一季三ヶ月の理一丈は一月一機十二丈は一年十二ヶ月の理、巾九寸は夜晝九つ、子午の理、四つ梭、九寸巾は四九三百六十筋、一年日數の理なり、二端を一疋と云ふは半年の理にて牛馬は人間に比較す

れば半年の理より供備せず、一機は一年一人の理、二反は半年一疋の理、人間には一年の理、供備る首より上冬夏の理、首より下春秋の理、牛馬全體にて人間の首より下と同一の理なる故に半年二端を一疋と云ふなり。

壹人一年一機。一疋半年貳反、人間首より上冬夏の理を供備す、首より下春秋の理を供備す、牛馬全體人間首より下と同一の理也。

●着物の理

着物襦袢帯七五三注進繩七着物五襦袢三帯七、五め三なわ着物一反七つに裁つは七は切と云ふ理にて身に纏ふ事を着と云ふは切ると云ふ理なり是第七大食天尊なり五は襦袢にして五體に纏十の半なる理にして襦袢即十半にして五つに、裁つなり是第五雲讀命なり三は續ぎにて繩なり帯なり結ぶ續ぐと云ふ理なり一筋を左右より二つ結びて三となる繩と帯とは同一の事にて是第三國狹土尊なり故に女出産の時安産の許を受る事を帯屋と云



帶屋は國狹土尊の司にして産王様と云ふし七大食天尊め五雲讀尊なわ三國狹土尊右三神何れも女神なり故に此の三品を女のしんしよ女の身代と云ふ三品とは着物襦袢帯しんしよしんだいとほ身上身體の事也、女の大切なる物なり。

膳の理

膳とはろつく揃ひし

眞實をいふなり

以上六つ揃ひしを

本膳と言ふ



膳とは膳に揃ひし眞實を云ふ膳とは即六つ也、飯、汁、壺、平、猪口、箸の六也。

以上六つ揃ひしを本膳と云ふ、飯は洗米を六臺に載せて煮たるものにして六つ揃ひ又膳の臺にする本なる故に五膳と云ふ、一品にて總名を取る也、是第六惶根尊にて男の理にて亭主なり、汁は菜なり妻なり七なり妻は内の事を知ると云ふ理にて汁と云ふ七はさい

是第七大食天尊、汁は女の理にて妻の事にて菜と云ふ、飯菜夫婦壺は男一之道具の理にて是れ月讀尊、四品が理なり、平い女一之道具の理、是國狹土尊、三品が理なり、猪口

は諸冊之二尊なり、ちよくとは直しいと云ふ理にて身體直に保つ理にて男女の道直しが天理、猪口は直し箸は月日二柱之神、食する口は雲讀尊、左右の手は大戸邊尊以上拾柱之神なり臺は地四方正面にて東西南北なり載する器は天なり食物は神の心なり味ひ也。

水靈、火靈二つが元本なり、又六臺は竈の事也、かまどは九洞と云ふ也。

膳は五つ有て五せん、箸は月日様、食物は神の心味い。

母の乳を飲むも同一、天の續ぎのじき物なり食物は天と身體の續ぎの命なり、天の實が



一四四  
入つて下さる故活きる食物入れてある内満ちる時は満潮の理、食後は蓋をあお向けにするは引潮の理。

●りきもつの譯

木實、くだもの一、穀物二、野菜三、右三品は人體五行と同一に御守護被下るなり、魚類四陰にて水氣入込暖くみは世界より受る、鳥類五陽にて暖み入込、水氣は世界より受る人間りきもつは種と卵より生ずる物を食するは天の理なり、生れながら親と同じ形ちなるものはりきもつとは云わぬ、水と米は充分まい舌に合してある、是がからい冬、あまいが夏、にがいが春すいが秋、此四つを合するとむまいとなる、則ち四合せ内の仲宜敷がむまいといふ合せのよい内といふ、此味いでしたといふなり、夫婦息見わん月日和合にて息出る言葉、風見える惶根様の御守護なり。

五穀第一米、第二麥、第三粟、第四藜、第五稷、一種稗と云ものあり、食にあらず。

野菜、第一大根、第二蕪、第三人參、第四午莠、第五芋、第六蓮根七芹八、蔓物に生ずる一切の野菜、右八方八柱の神の理なり、八百屋といふは此の理より始まる、山に自ら生ずる、芋に自然薯あり、五穀と野菜を菩薩と云ふなり。

●文具の理

身體が子、丑寅は墨、卯は中の水、辰巳は硯（女の道具も同じ理）

午は机、是は面足様故臺なり地なり膳でも總べて乗せる臺は日様、未申は紙、酉は筆の毛、戌亥は筆の立つて居る全部軸（男一の道具も同じ理）

萬事神様の事や人の事、人を助ける事又人の爲めに頼まれて書く時は例へば机に向いて御諭しでも書く時は我が身が國常立尊様の理、萬事我が身の事書く時は我身が伊邪諾尊様の理なり、書く手は大戸邊尊様、皆神様が御守護下さる、膳の理、文具の理、此二つ極竹き大切な事也。



屋敷堅め石搗の理

人間の住む家を建るに、やすくりと云ふのは、やといふたら月の事、なせなれば、三夜の月十三夜の月十五夜の月廿三夜の月と云ふよるはやとゆふ夜は月なり月は夜なり世の中と云ふのも月の事や、どうゆうのも月の事なるを以てやづくりとゆふ、此家を建る所をやもきと云ふのは屋を定める故やしきと云ふ、定めるのは四季でさだめるなり又八方八柱の事をやしきと云うなり。石搗をするには戌亥の角より辰巳の方へ行夫れより八方つき終りて又いぬいへ納める理は戌亥月讀之命様本心は破軍星なり辰巳國狹土之命様の本心は原助星なり、月讀様は男の一の道具國狹土様は女の一の道具此の二つは、星は一日一夜の内に兩方からはこびあい此世界の真中で二星かさなり又元の所へ戻る星なり、是故戌亥より辰巳へ搗始め辰巳より戌亥へ納めりなり、此時に「よの、ひよあうたんど云ふのわよのひに逢たんどゆふ事なり」男の子をばうと云ふのは戌亥月讀様は身の内ほねの守護又男の一の道具此つよき理をばうといゆう、むりといゆうのも同じ事みなつよき事をむりと云うなり。

●宮社堂館家の理

社と云ふは男の體を云ふ體とは首より下を云ふ建始め戌亥の理にて腰也、腰は身體中骨の要也、龍頭なり此の要にて身體立つ也、故に人間立たざるを腰抜けと云ふ表は腹、裏は背兩側は左右の肋なり棟は胸なり棟より雨垂れ落ちる故に胸の下を水落と云ふ也、雨は水雨垂落も水落と云ふも同一なり、兩腋は破風なり、社と云ふは八柱の神の代なり、しろなり體なり、乳は棟の紋なり、腰腹肋胸背腋鳩尾、乳臂は地形なり地場なり、神前鈴は男一之道具、鳥居は天なり、堂と云ふは胴と云ふ理にて女の體を云ふ、戌亥は建始めの理にて腰、表は腹、裏は背、兩側は肋、棟は胸、雨垂落は鳩尾、破風兩腋、乳は棟の紋立關口陰門會堂本堂御堂とも云ふ、人間參詣して中へ這入りて禮拜すれば子懐胎、胎と同一にて下向は出産、同一なり、堂は中へ這入りて禮拜する故女の胴體の理なり、社は神を鎮座して中へは不入外より禮拜す男の體の理なり、尤も神の社と云ふは天地の理身體の理なり、頭



顔は上、即ち神、胴體は下即ち八代なり、社と云ふも堂と云ふも皆天より其形を教え其の理を下げ給ふ故に左の肩右の肩と云ふは左右の形は肩なり、左は月様、右は日様乳七夕の二星なり。

○宮の理、みとは水、火風三つ、やとは八柱の神、人間首より上を身と云ふ、下體をやと云ふ、やとは八形の理、人間住家とする處を館と云ふ、やかたとは八方の理、世界にては八方の理、館は家と同一なり、右何れも臂は地形也、宮、社、堂、館、家皆同じく月日二神より其形を教え玉ふ。(伊弉册尊様の御腹より元々人間生れ出したる此理で宮と云ふものが後世に出来た(子袋の理))

### 鳴り物の意味

なる云ふは言葉に理ある故音の鳴るも木の實の成るも物事の成るも理は同じ、是を字で書けば違ひあれ共文字は物事色々の品を分ける爲に後に出来たるもの、名は元なり。言

葉が先きにて天理より名が付く名に理が有る也、なる云ふは月様の理、世界轉りと包め玉ふて守護下さるで何事も成つて居る理、又神樂勤めに鳴物九つを使ふと云ふ理は、此世人間は月日の御苦勞九から始まり九の(苦)世界人間は九の胴といふは九つの道具の借物也目、耳、鼻、口、臍一の道具、手足首の九つ、又世界の人間は産に廣まり(三)水火風三つ衣食住三つにて命を續ぐ、人間は心と口と行いとこの三つで、三三が九と云ふ、此の九(苦)を勤めるを人間の勤めとす、故に神様の勤めにも九つの道具を使ふ理なり、人間萬物は天地神の息で育ち成人する處の理を合す神の心と調子を合す理なり。

又此九つの鳴物は元々の教わりより故有つて二三點變りあれば現に使ふ物に付て不完全乍大略を記して研究の参考に供す。

拍子木で辛を取るは人間宿し込み體内で理が増すのも産れるも夜晝成人するも粒毛草木育つも花咲くも實の乗るも味の付くも萬物皆月日の指圖、四季日夜四季にて定まる定規なり、木は眞直能く副附く故其陰陽の理が合えばなる、心合えば成る故に上役の人にて拍子



木を辛といふ、琴はこは月日親様の光の理とは十柱の神の理、糸十三筋十は十柱神三は天  
地人又一年十二ヶ月に閏の一日月を入れてある又世界萬事の事が神の光也、鼓は羯鼓も略  
同じ理、つは切る事、みは水の事、水は續ぎ上下同じ丸く中を繩にて十文字にかけ續ぎ縮  
めて有るは切る事を續ぐ（續ぎの神様の理にて）天地抱き合せて世界に夫婦の縁を續ぎ被  
下る所の理を打つ、胡笳とは人間は萬物事のこきうが第一心の味いこは月日の光きうは  
九つの道具の理、天地陰陽張合、持合心のこきう。又息をする事をこきうといふ。

擦鉦、金は此世の續ぎの理、心の合ふをかねと云ふ双方の事をするをかねると云ふが如  
く、又物事に當りて成す事をするに云如く又二本の棒にて打つは一家では夫婦の理にて心  
を合して摺れ合はぬ様互に立て合ふてすれば心の合ふをちん／＼と云ふ如くきまりよく何  
事もちん／＼とよく成る理、笛とは風、人間上下共に其風なり夫は夫の風、妻は妻の風其  
風さへかけばなる、吹けばなる風榮、物の殖え榮える理、即ち風は息言葉なり、風は天地  
の息にて萬物生きて行く最も大切なるもの也、穴八つは八方揃ひて吹くと云ふ理。

各々其風本分を守り睦じければ物が殖える成る理。又太鼓大きい事を大といふ、こは光  
る遠音響くは太鼓也、表裏張りべたるは月日、天地を抱きしめる理、ぐるりと紙にて縮て  
有る、紙は月日の理、此世界を月日で縮ている理、誠は月日の心にて大きく光り遠く響く  
物の長たる理、琵琶の糸三筋は水火風三つの理にて天地人を續ぎ合ひの理で、（三味線も  
略々同じ理）洞竿音縮心のねじめが第一なり。笙とは正しき眞事を正と云ふ、又人間に子  
の宿る時情合を正といふ、濁りなき心の理、正の事とは違はん事を云ふなり。

九つの鳴物を入れて勤めをするは月日、夜晝二苦身の内世界九つの理を合して二九十八  
十八は陽氣と云ふて二九となる。心の苦を忘れ心勇めば肉となる、身體は肉が元、水氣温  
が是陽氣也、神の心に合して勤めば神勇む神、勇めば人間萬物皆勇むゆへ、陽氣勤めと云  
ふ。又箏、鳳、笙、龍笛の三竿を合す是れは最も古くより傳えられたるが總べて此世は  
三つ揃わねば完全成らぬもの音律の名を壹、平、双、黄、盤、大中小の三曲、又祥事市事  
四季等に依つて奏樂の法式有りて俗に八十八曲と云ふ此の雅樂の由来中々深し。



神前供物の理

三平	鏡餅	神酒	洗米	生鯛
平物	水	鹽	野菜	
櫛	木實	辛味		
五行のきれ	玉鏡		櫛	五行のきれ

神祠

神前五列の供物は五行の理にて五行とは木火土金水。

木甲乙、火丙丁、土戊己、金庚辛、水癸、五倫五體にて十干なり。  
 神酒は木の理にて甲乙、餅は火の理にて丙丁、生鯛は土の理にて戊己、三平は金の理にて庚辛、洗米は水の理にて壬癸、野菜は八つ七つ丑寅、八七鯛の理、大食天尊なり。木の實(菜實)は六物の揃いし理、惶根尊即ち風、辛味は月様、味、干物(乾

物)は日様味。魚は陰鳥は陽、鹽は大食天みここに月日の味籠りて味の王と云ふ、辛、甘、苦、酸四の王。

供物道具並に飾付の理

三寶は水火風、膳は陸に揃ひし理、翠はみづの理、眞菰は生れ落ち菰より出世する理なり、水玉は人間の心なり、此の玉の水の如く一名一人の心を澄して仲能く和合して暮す心を親神に供ふるなり、此事を水の大恩を知ると云ふ、之れ朝之明星なり、三つの燈明は人間の行ひなり、身體明るう暮す、世界明るう通る行いを親神に供ふるなり、明るうとは身に暗い行ひをせぬ事なり、此事を火の大恩を報ゆると云ふ、三つ一つの理にて宵明星なり、水玉は朝明星真心。燈明は宵明星誠行ひ、心は夜行ひは晝、鏡は月日二方の御身輝やく理にて鏡と云ふなり、神殿の左右に建て供ふる櫛は神の氣なり、神は人の心とは逆なりさかさなり人間も五歳迄の小兒は大人の心とは逆なり、神のきなり、毎例も青々として









産を司る理、竿と云ふは産の王と云ふなり、猿王権現猿田彦之命又庚申とも祭るなり夷  
 を少彦命と禮拜するは人間は分丈相應に金銭を持ては少なくとも足納して喜んで居れば  
 福の神少彦尊なり、又莞爾と笑つて暮せば惠美壽様なり、毘沙門天の姿は産する時の婦  
 人の力みの理を顯したるなり、笑ふ門には福來り、怒る門には鬼來ると云ふ、家内仲よく  
 笑ふて居れば福神の祭り怒る心は鬼なり、世上には鬼と云ふ者は居らぬものなり、腹立怒  
 り強慾重慾の心が鬼なり、悪氣なり鬼は心の内より出で福は外より入るなり、内は我身な  
 り他人は外なり、往古より節分に煎豆を蒔くに福は内、鬼は外と云ふは正しく反對なり、  
 なせなれば福は世界外に在り、鬼は我内銘々の心に在り、故に福は外、鬼は内なり節分と  
 は身體にては萬事思ひ斷ち思ひ切る事にて世界にては萬づ芽切る事なり、一日にては夜丑  
 の下刻一年にては十二月中終り、正月節の始めにて四季四節、旬の始めての大節なり、豆  
 を煮るは悪氣の芽を出さぬ理、鯛の頭を用ふるは目鼻口耳の四つを祝ふ理にて祝四、即ち  
 ゆわし心思ひ始めには此四つの使い方を祝うなり、鬼の目刺を差すは強慾重慾、怒る心の



芽を出さぬ理なり、能く往古よりの式來りの例を見て其の元本の理を考へ人心を改良すべきなり。

正月祭りより十二月の理

年の始めを正月とゆうは正しき月とゆふなり月は此世の元の神國常立命様なり此神様は人間身の内目胴水きの守護世界は水の司り夜を照しようから始めて此世とゆふ人間やごし込みの時は上よりつくがゆへ月様とゆふ。  
此月は萬物の親、萬す始め年の始なり年とゆふ事は十方とゆうも同じ事又日の始めも月が元となる此正しき月の始めを正月と云ふなり。  
朔日と云ふは元泥海より月たちあがりし事を云ふなり。  
二日ふとは月の事(つとは畑の事)日様が人間世界を拵へるそうだんなされし事なり。  
三日はみとは人間身の内の事みで産み廣めた事又水の事をゆふ、つとは月より人間のた

まひいと身の内と切わけたる事を云ふ。

日は火の事ぬくみの守護なり一日二日三日此三日を水火風と云ふなり是を正月まつりとゆうなり此祭り様は家の門に松棚を建て七五三を張りひくなり。

松は男松女松是は國常立之命の御姿頭一つに尾一つの三で産み廣めの事又水の事とゆふ大龍の事、ちど日の面足之命様の御姿は頭十二尾三つの大蛇なり男は月様女は日様此月日の鱗ある木は松なり、又葉は、二つならんで、さかへ、ちりをちくさるも共にはなれぬは天地夫婦のゑん結び互の誠思合、へだてのないは松葉なり又桐はさかへ木と云ふて元人間は伊邪那美様の胎内になむくと二人づゝやごし込れ三年三月止まりて七十五日の間に泥海中へ五分から産おろされ同じ胎内へ三度やごり其後は虫けらいぎよの物に八千八たび生れ變り又其後國狭土之命様の腹に男五人と女五人と都合十人やごまり十月目より五分から生れ此間の年限は九億九萬年なり人間始めて地に上りし時は山の中なり是れより五十九年前十月廿六日迄のやごしこまれ三年三月とごまりて七十五日の間に年限は九千九百九十九



年の間にだん／＼さかゝるきたのも神のしゆごう元地に上りし思を忘れぬ爲榊を立るなり、しめなわとゆふのは、しめごは一年の理をしめる事を云ふなり。なわ、なは月われ月つきはきれめのなき水の御守護を云ふなり。七五三と云ふて七は天神七代五は地神五代三は水火風の理是を合して十五となる是れ月の満ちる數なり又此神様へ供へる物は鏡餅と雜煮なり鏡餅は月日の形なりもちごは夫婦親子兄弟心をやさしくもち家業も丹精にして家をたもち身をもち寶をもち行には家内心をねりやはせて行ねばもち切ぬ此もちをこゝじ幾つう幾升も同じ様に練り合すでもちと云ふなり豆腐は十柱の神のふうを云ふ心白く四方 正 面内も外も同じ理なり。

昆布は元人間泥海中でこんぶのねもごに身をかくしようきたのしきをだちきたゆへようきたのしき事をよろこぶとゆうなり。

にしんの子を、かすの子とゆう、にしんとは月日をゆう數の子とは九億九萬九千九百九十九人の子數をゆうなり、其他年中でけたるいろ／＼のものを一時に煮るゆる、ぞうにとゆ

うなり又年酒とゆうて酒をのむは酔とゆう事に理があるよい月様ようきの神此のふしをよふとゆうなり御神酒とゆうは此事なり三日の間石の物を献まつるなり。

四日は四方の日五日は五りん五たい六日、六だい身の内此六日をとしこしと云ふは六だいの神のかり物を十柱の神で十用しまるゆへとゆうしめ光しめとゆふ七日天神七代八日は八方九日九のごう九のせかい十日は十方十柱の世界定まり十分の理是れより元へ戻り十一十二と順にゆくなり又十四日を年越とゆうは人間十四を越へ十五になれば一人まへとなる、月も十四日を越十五日となれば満月と成る此理を以て十四日年越しとゆふなり。十五日のついたち小豆粥米粟の餅を入るは泥海中に月日兩人あり月は水をふき日は火をふき泥海中を照していた元ごろかいを、かたごりて、かいとゆふ小豆を入れるは粥をにごす爲なり夫れより廿日三十日となれば正しき月を終りと成月は夫日は妻なり女は三十日同じ様に日を照しても一と月ごをさゑるは月は夫なり日は地なり月は三十日の内一日満る故一と月と云ふなり二月は月日かさなりの理あるゆへ是をまん月と云ふ、十二日夜は夜中に月見ゆる。



三月は水火風三日を節句と云ふは人間三から生れ、水火風で生ている故三月三日をせつくとゆうなり、是は人間三三の六みちの日ゆへ大海のしほを大小干なり。

四月は四方の世の中月。

五月は五りん五たいの理五をせつくとゆうふはりをふく事なり。

六月は六たいの理朔日を半がためとゆうふは壹年の半分目の月故はがためとゆうなり。

七月は天神七代の理七日より十日まで、ぼん祭りと云ふは元十柱の神が臺となつて、ない人間ない世界を拵へた故臺を、ぼんとゆうふなり、よつて十日の間月中を祭るなり。

八月は八方八柱の神の理。

九月は九のごう九日九の世界此九九は、二九十八の心よりきなるゆへ月五歳わたり、よきに守護ある故せつくとゆうふ。

十月は十方十柱の神御揃になりようきおごりをして人間やごし込み又生みおろした後月日より遣ふた道具に神名をさづけたまうゆへ十月を神名月と云此の世の始め人間始めは十月

廿六日なり又此度助け始めも廿六日なり。

十一月をしもつきゆうは霜降りて云でなく十分理揃じまいの月ゆへおさめ、しもうた、月ゆへしもつきとゆう。

十二月をしわすと云うは、しわきる事、わはつなぐ事、すわ切る事、無い月日を始め此月でしまい故元へ切かへることをゆうなり又人間一年の理をべて藏をべしをべしわきることも曰ふてあるなり。

### 神を祭る理

十柱の神を祭るにも月日を元としてなむてんりおのみこと、と十人の神をいわいこめ社の前へ又は鏡をたてあるは天の月日は鏡の如く祈る心願ふ鏡に現る如く月日の御受納ある事なれば精神を清らかにして正直なれば其修理ある事有なり。



り。  
 水みづを供たなへるわ人間じんげん心こころも水みづの如ごとく、すぐいきれいなよごれのない、ちぎんだものはふやし死し行ゆくものを助たすけいろを付つけ人の心こころのよごれをあらひ、丸まるきも角かくも人ひとにしたがい行ゆく心こころを供たなへるなり。

鹽しほを供たなへるは人間じんげんも鹽しほの如ごとく白しろいきれいな味あじのよき水みづへ入いれて姿すがたうしうても變かはらん物ものは鹽しほなり是これを以もつてやさしき人ひとを、しをらしいとゆう又また

洗あらひ米いねを供たなへるは、ほしい、おしい、かわいい、にくい、うらみ、はらだち、よく、こうまん  
 の八やつをはらいまこと眞しん實じつより人ひとを助たすける心こころになりし理りを供たなへるなり。

又また御お燈とう明めい光こうりを三さん口くち供たなへるは水みづ火ひ風かぜの理り此この風かぜであしきはろうて我わが胸むねの内うちを暗あん夜やに火ひをともせし如ごとく天てん理り人じん道だう明めいにして萬よろづの元もとまでも悟さとり取とる心こころになりしむねの内うちを供たなへるなり。其その上海うへ山やま里りの珍めづらしき者ものを供たなへると云いふは百ひゃく味みと云いふて我わが心こころにはごのような味あじもあるまあすぐな心こころお、ありますとゆうなり神かみを祭まつり供もつ物ものは皆みな我わが心こころをそなへるなり。

又また相あ手てを打うつ杵かみをするのは右みぎの手ても左ひだりの手ても十五ごふしある是こゝをあわして三十さんじゅうふしになる是こゝは一いっヶ月げつの理り二につ打うつては六十ごふしとなるは内うち々く睦むつじいと云いふて打うつ理り四しつ打うつは世界せかいも内うちも六むと云いふ事ことなり。

拜はいをするのは人間じんげん顔かほの上うへに(したい)とゆうところあり神かみをうやまふにも下したへさげ人ひとを敬うやまつふにも下したへさげたいと云いふのは人間じんげん身みの内うちにある、あをい、あかい、くろい、きいろい、しろい、の五ごしきあり神かみの教おしへを心こころへ承しょう知ちした事ことと人ひとの心こころを承しょう知ちした事ことを拜はいと云いふなり。又また神かみ樂らく勤ごんは神かみをいさめるためによろきおごりをするなり。

おぶりとは、月つき日は此この世よの王わう、をう、うやまいきそく守まもるもおごりなり又また親おやや夫をととにそむかんのもおごりなり皆みな目め上うへのさしすそむかんは、おごりなり王わうのごうりにしていれば神かみの心こころ叶かなふ事こと是これお神かみたのむと云いふなり。



九つのなり物の理

なるご云ふ言葉は音のなるのも木草の實のなるのも理は一つや是を文字で書けば違えども文字と云ふ者はいろ／＼分る爲の「もん」「あざなを分る故もんじと云ふてあれども、なりものご云ふは言葉では同じ事や此世はことばが元やで、などゆうのは月様の事、なりごゆうのは國常立之命が此世界をくるりごくるめている處の理をもつて「なりと云ふ、それで此九つの道具をなり物と云ふ、此鳴物九つある理は人間は九から始まりて九でおさまる所の理なり。

又人間には九つの道具あり目耳鼻口兩手兩足の道具是れこゝのつなり。又世界人間三で産み廣め水火風で守護して衣食住で命をつなぎ身上を敬ひ、身下を憐み我身の行ひとの三つ是れ三三の九のゆふ勤めに此九つの道具遣ふは此九つの理によつて人間も世界もいきてせいじんする所の理を合す爲に此九つのなりものをいれるわけ九つのなり

ものご云ふは

ひようしぎ、こと、さみせん、つゞみ、こきゆ、すりかね、てびよし、ふる、たいこ、ひよしぎと云ふはひよしぎで人間のやとまるも胎内でありすますのも生れでるのも、よるくせいじんするののも又世界の、りゆうけい、そだつも花のさくのも實のりもあじのつくのも此月日のしきで定まる是をひよしぎと云ふ、故に上役の物でなければつかわれん此理なり又壹年十二月に閏の一と月を入れて十三すじにしたる意味其理をたんじるなり、あのことこのことこのこと、わがこと萬のこと云ふは神の光りを云ふなり。

さみせんとは、水火風の事せんと云ふ事は元の事を云ふなり、糸みすじは天地人をかたどり、水火風の三つの味の理此三つが元を三味せんとゆうなり。つゞみとは、つとは切る事、づと云ふは同じ事、みとは水の事なり。つゞみは上下同じ丸いもので其の上切る所をつなぐためになはを十文字にかけてしめてあるよつて天地だき合せ又夫婦のきれんようにつなぐところの理を字つなり。



こきうとはこうは光の事きゆは九つの事なり人間のいきをこうきゆと云ふなり、ものゝは  
 ずみをこきゆと、みなはりあい、もちあいのはずみの理をひくなり。

すりがねとは、すとは切る事なりかねとはつなく所の理をゆうなり、つなく事をかねと云  
 ふは二つのことをするをかねと云ふ又ちんく音のするは天子様の事世界でちんと云わ  
 大切な事をちんと云ふ又子供の一の道具の事をちんぼうと云う、ちん物ちん重、物のき  
 まりをちんと云ふ、又ふうふ中よき事をちんくとゆうなかよき事をちんくとゆうは、  
 すりかねを打つには二本のぼうてうつのは、あなたの、する事はわたしがする、わたしの  
 する事、あなたかすると云ふ互に立やいの理をちんくとゆうなり。

てびよし左は男右は女月日をかたごりたるものなり、天地だき合せのりを、うつなり、人  
 間生れでるのも死行くも月日の御守護此理を以て佛法にても葬式の時、みようはちと云ふ  
 物をうつなりみよとは文字から見ても月日とかく其形てびよしも同じ事月日だきしめる理  
 なり。

人間は日月のふどころよりやごり産れても月日のふどころに住みて死行も月日がたましい  
 をだきしめる理をあわすなり。

ふると云ふは、ふはめいくのふう上も下も其ふうあり夫は夫のふう妻は妻のふう此ふる  
 ふいたらなるであろうふうとはいきの事いきは風なり是の世に空気が大切ないものはな  
 い空気が月日のいきや其月日のいきで人間はいきてる又萬事いきある者は日月のいきが  
 ついている花の咲くのも實のなるのも風があるからや此月日の御いきがなければ何にもな  
 い此日月の御守護によりていつまでもなごうつどのくや。

ふうとは風なりいきの事、ふとはながへ事さかへる事をゆうなり、其口と子あな七つある  
 を合せて八つとなるは八方のさかへをふくなり、ふくとは徳のあることよきことなり。  
 たいことは、たいとゆうは、おふきたいのこと、こうは、ひかりのこと、なり遠く音のひ  
 どくはたいこばかりや、表も裏もはりしめたは月日天地しめいる理なり。又ぐるりにびよ  
 にてしめてあるは日夜月は月日の事なり、此世界は月日がしめているとゆふ事なり。



右九つのなりものいれてつとめをするのは、人間も世界も九つのごうぐの世界此二九を十八云う十八をようきと云ふ、此九つの理を合す爲にようき勤に用ゆるなり。

### 草木に花の咲く理

世界の物は皆夫れく花の咲くのは、其者の子をうみだす元なり、白い、赤い、黒い、青い、黄い、此五色は性質によりて違々とも皆夫れくの本生なり花の色も違々だけは其實のあしもちがうなり花にはめんをんの二種あり女花と男花とのこうごうする故實がのる物なり。男花とゆうは實を結ばぬ花を云ふ、女花とは實を結ぶ花を云ふ、此こうごうは東西の風で交合する、其わけは別に風の理にときおくなり、人間女は十三歳より一と月に一度づづ月水の下るは草木に花の咲くのも同じ事月水下るあごさき十八日間に交合すればあんなすいのるものなり、十八日は前六日月水下る時六日あと六日三六十八の間をゆうなり子やどりこむ所の理は、人間身の内のなはしろに委しくするすものなり。

### 竹に寅とゆう理

寅と象とは、げさものなり寅とゆうは、此世界であらきけものなり、なれど象におうてはしんの骨がくだけてしまふ者なり、又象は竹とげさものなり、故に竹の中へは入らず、象の骨がくだける故寅は此理を以て竹林の中に住んで象の道を通れ寅の爲には命の恩なれば是を世界の人間に教へ天地の大神をしらす爲に竹に寅を書くなり。

### 牡丹に唐獅子の理

獅子は世界第一のけものなれども獅の身中の虫と云うて體ちうへちいさき虫湧く時は唐獅の命を失ふなり、其時獅の命を保つこととなりし故獅のためには牡丹に恩ある事なり。此世に生ある物にはげさやくあれども、それをけすものあり、又人間にもごくとなる人もあり、又助ける人もあり、助けられたら我命にかへても恩をおくれとゆうために牡丹に獅



をかくなり。

庚申の理

かのわさる、の月をこうしんどゆふなり、こうは光る事しんは神なり、心なり、目なり、はねなり、親なり、親孝心なりと云ふも此事なり、元人間いざなみ様の腹に九億九萬九千九百九十九人の子數を三日三夜になむくと二人づゝやどり、三年三月止まりて五分から生れ九十九年目に三寸五分まで成長して又死亡す又元の人數同じ胎内へやどしこみ此も五分から生れて九十九年目に四寸まで生長して此時伊邪那美様はこれまで成長してからは五尺の人間になると喜び、につこりわろふて死亡す、親のあとしどうて残らず又しぼうす、これより鳥畜類のはらを八千八度生れ變りし時猿が一人残り居て此猿は國狹土の命なり此腹に男五人女五人とやどりこみ十月目より生れて是も元は五分からや生れてだんく成長に應じ天地水地分りかけ一尺八寸まで成長した時子が親となりて男一人女一人と二人づゝ

やごまり是も十月目より生み下し今に至るまで生れでるなり、此鳥畜類より元の人に成時のつなぎ親を、こうしんどゆう、こうしんは八千の内におり、八千とは、鳥畜類に八千八度生れ變りし利を云なり、此時國狹土様の守護で月日てらば、ふらず、ふらば、てらず、此理で八千の入に雨降れば八千中照る事なり又入の日に照らば八千中は、雨ふるかくもるかするなり、又人間こうしん月は風を引くはつなぎ親より心のそうじせよと教へ被下事であるなり。

湯たちの理

人間親が親となつて女男二人づゝ産おろした時に其子をあろうため、天よりぬくい水をふいてくだされた故今に於ても子が産れたら湯を以て子を洗ふ事なり、月日元々湯を下した理を以て、今所々へにわに降る雨を湯立とゆふ夜ふるのも晝ふるのも同じゆうだちなり



しきものは、六尺に三尺を一まいと云ふのは人間一人天理一つ天地も一つ々々東南西北も一人限り世界も一人限りそこで世界一枚と云ふもしきもの一枚と云ふも同じ事や一人寝ても三六のはゞで十分や起ても十分すわれば三尺四方にて十分なり、世界は何程大きいても人間の住所は三六よりないものや、一寸東へよれば西が一寸あく、千里北へよれば南が千里あく故天地八方も人間一つに一つの理よりなき無き故一まいと云ふ、又しきものとはよろしく九十六四季の内にやどりこみ生れでたり又死行も此刻四季なり人間はしきの上でぞだつ故に三六のしきものさゆう又三六を一人まへさゆうは人間三から生れ六だいの神のかりものやで十用するゆへ三六を一人前さゆうなり。三と六とは三六十八さゆうてようきのかすなり、「又疊は三尺に六尺是を、じようさゆうと云ふは一は、「ひととはさゆうて此世のはじまりじや、うはすじさゆうて切てもつなぐをすじと云事で「一じよとは月日天地相はなれん事人

間の心も人のためを心に忘れぬ事を助け一じよさゆう、其の疊の上にて半じよ寝て一じよ(心一すじ)さゆうなり是を二枚ならべて一坪さゆうのは夫婦あわした事なり「つばの理を以て女ぼうさゆうなり、是六六四方は三百六十日一年の理となるむつまじいの理を、もつて男をつまごゆふ、女を妻とゆう、ごちらも同じつまごゆふは睦まじい中をゆうなり四方六九なれば内むつまじい世界むつまじいと六九に納る事なり。

印形と肉理

ゐんどゆふのは月の事ゐん水とゆふも同じ事ゐんすいは身の内骨のしんにある水氣なりゐんが元で骨がある「ほねとは天地八方の事人間も骨が元で五たいとなるなりゐんどゆふのはほねの事又にくと云ふのは身の内の肉の事世界九つの理と身の内九つの道具の理と合して十八となる、此よふきで「二九と成心いさめば肉もますますくふへる心いすぬば「二九もへる身の内のにくは、水きとぬくみなり此二つの理ではねも肉も五分々の持合で五たい



をなすものなり人間名前の下へ印形居るのは我五體を居へるなり。

### 十路盤の理由

此そろばんを「さんどゆふのは人間三で生ひろめた事さんからひらけた理を云ふなり」「八さんの元は一九が九から九九の聲を遣ふは人間九つの道具の理と世界九の理とを合して九の聲を遣はねばならん事なり此一九は元なり九一、加一、九二、加二、九三、加三、九四、加四、九五、加五、九六、加六、九七、加七、九八、加八、此八つを以てはつさんと云ふ元の九とて十にまん三せん四ひやく五十六こく七とう八しよ九ごうと成是は米の舂目ではない人間身の内の事なり」「一を十とゆふのは一に月が始めて日様にたんじ八柱の道具の神をみだし都合十柱の神が一つに成て拵へた人間なり一から十まで定まれば又元の一つにかへらねば數は十よりない又元の一にかへる理と一から十を拵へた理とで十を一と云ふなり十用とは此事なり」「二まんとゆふのはいざなぎいざなみの二神を人間の種苗代につく

り人間の父親母親と成た事とゆふなり十五日まんげつとゆふも月は一日より理がみちてまゝるくなり是をまんげつと云ふ人間も母のたいないへやごりこみし時は水なれど十月の間に五りん五體となりて此世へ生れ出る是を月満るとゆふみちとはまんの事二萬とは父神母神二柱の體をゆふ又人間のめい／＼のからだもまんと云なり人間の元とゆふ事なり又三からうみ出した事をゆう三とは大食天之命は親子胎内のゑんきりの神大戸邊之命は引出の神國狹土之命は古血を下し皮繋ぎあとしまいの神様なり人間生れでるには此三神の守護でなくは産む事も産れる事も出来ん是を以て三から産廣めたとゆうなり千とはせんは元の事なり是を三千とゆふなり。

四ひやくとゆうのは一年四季春夏秋冬なり月四季は七日半を一季として三十日に四季あり日四季は三時を一季として十二時に四季あり一時を二刻に分ちて四十八刻あり此内に四季あつて九十六四季となる是れ一日一夜なり此刻四季より人間やごり又産れよる／＼せいじんするも又草木のびるも花開くも四季より出来る此世の萬開くは元なり開とゆふは日夜九



この言葉なり夫で四百とゆう此四季の理は別に説明す。

五十とゆうは身の内五たい左は男神右は女神十柱の神の自十由用にて五體となるなり。

六こくとは身の内目は月様のしゆごうぬくみは日様の守護皮は國狹土様の守護骨は月讀様の

守護是で五たいとゆうふ、いきふきわけはかしこね様の守護是で人間身の内六たいの神の

かりもの、身の内六くろとゆうふ、此六九の借物此理を六石とゆうなり心六九身體六九世界

六九なれば、三六十八よふきに光る體なり。

七斗とゆうは七柱大食天之命親子胎内のつなぎを切り分け元は一つのを人間と世界に分

け親と子とに分ちて身の内も世界も十柱の神のしゆごうかわらん理を、とろとゆう又身の

内五たいと世界は水火木金土の五こう、きつて合して十と云ふ。

舛と云ふは八は八方八柱の道具をもつて紋形ない人間を産おろしたるを云う。

生舛とはむまれる事又いきていることもゆうなり。

九合と云ふは九と九と合したる事を云ふ此九と云ふは身の内九つの道具のかりもの又世界

を九の世界と云ふ、これは、なりもの、理にある事ゆへ季、しきは鳴物の理と引合すべし  
十路盤けた上五つは五りん下五つは五體都合六つの玉は六柱の神の理是を九九の聲で遣ふ  
は六九と云ふて身の内を納め心の納め六九より外になし身の内六たいのかりもので、九つ  
の道具十用するは十五日満月の以所又九つのごうを六たいの神守護あるは、九十六四季の  
理を以てなり九六で日夜九と云ふ故開りゆ開坪とゆう、かいは、ひらくとゆう事火は日な  
りゐは月なり日夜九となる百とゆうも開とゆうも同じ事。

此地球を國とゆうふ理

人間のごう世界この世界此二つを合して九二世界あつて人間なくば國とならん人間あつ  
ても住所なくば國とならん九と九とで國とゆう又郡とはこうは六たいなり人間身の内の事  
イは人間がすんでいること、國常立之命様はくるりと取まいて世界守護下さる理をゆふな  
り、依て理王分とゆう。



村とゆうのは六柱の神の理六九の理をゆふなり里とゆうは月の事かんろのさどりのこと。

### 四季の理

四季とゆうのは春夏秋冬の四つをゆふ春とはつわるとゆうてつは大食天之命きる御守護の事をつとゆう、つできるところへ芽の發ることをつわると云ふ、はるは萬物の芽をふきだす時なり、じくと皮との間へ水氣を上げ實をふとらす時なり、人間は子のやどりし事を「つはると云ふも日々理がまして、はりでる事をつはるとゆうなり。

夏とゆうのはなは月様天の事水氣のしゆごうさむい事なり此水氣のさむき、ひやかい、理をつて地のそこへいりこみ世界が日のしごうさむき事あつくなるなり。

秋とはあは天の事「きは月日のいきなり天地のいき五分／＼のよふきをあふきとゆふ又月日春より夏まで萬物を育て十分の守護して手のあしき事もゆふ又人間春種を下して夏迄修理肥をして十分の實のりをとり人間の手のあく事を云ふなり。

冬とゆうのはふうは風なりゆはぬくみ日様は地なり、地のぬくみし時天のいき地にさがり風つよき故ふゆと云ふ又人間は萬物を目に見ていれば心よふきとなる目にみぬ時は心ふじゆとなる、ぶしゆともゆうなり此四季と云は三ヶ月を一季とゆふて三三九十日なり是を四季合して四九三百六十日なり此内春九日夏九日と四季のかわり目に十八日づゝ土用とゆふ事あり又夏九日秋九日是も土用とゆう秋九日冬九日是も土用と云ふ何れも十八日づゝありて都合七十二日四たびにわれば十八となる是半土用を四季のかわり目として八つに割れば九日づゝとなるなり。

春とは東「木（水）」の事、夏とは南火の事、秋とは西金の事、冬とは北「水（土）」の事是れ四季なり。

土用とは中土の事、此土は一年三百六十日の内に四度あらはれて水火金木土の五行となる是が五ふつふの神、即十柱の神なりあきれ春七十二日夏七十二日秋七十二日冬七十二日土用七十二日都合五つに分ちたるは人間の身の内の（ろくろ）左手十八右手十八左足十八右



足十八此ろくろの數七十二ふしの理なり。

四季とは一年三百六十日の間月日の差圖を四季と云ふ身の内も七十二のろくろで身の内十用の働き出来るなり一年七十二節と云ふも此理なり、月四季とゆふのは一ヶ月三十日の内に四季あり一季は七日半なり是を一週間ともゆう一日より七日半迄を春とゆう八日より十五日までを夏とゆう十六日より廿三日までを秋とゆう又廿三日より三十日までを冬とゆう依て一日より三十日によろきがかはりくるなり日の四季と云は夜晝の内とある四季なり一日一夜を十二時として三時を一季とゆう即ち三十二時なり朝卯の六つ辰五つは四つ此三時を春とゆう午九つ未八つ申七つ此三時を夏とゆう、暮、酉六つ戌五つ亥四つ此三時を秋とゆう子九つ丑八つ寅七つ此三時を冬とゆう依て日の出より四つ迄と四つより七つ迄とはぬくみも違ひ又日の色も違ふなり、日の入りと亥の四つ迄と又此九つより明の七つ迄とはよろきが違ふなり一日一夜に四季ある所謂也一時の内に二刻あり二刻とは月日の光りをこくと云ふ光はひかり九は一九の理なり十二時の間に廿四刻あり。

其譯は朝卯の下刻、辰の上刻、辰の下刻、巳の上刻、巳の下刻、午の上刻、午の下刻、未の上刻、未の下刻、申の上刻、申の下刻、酉の上刻、酉の下刻、戌の上刻、戌の下刻、亥の上刻、亥の下刻、子の上刻、子の下刻、丑の上刻、丑の下刻、寅の上刻、寅の下刻、卯の上刻と都合以上廿四刻あるなり。

刻四季と云ふのは此一刻の間に四季あり廿四刻の此げんには二四が八十に四四十六と都合九十六四季ありこの刻四季は人間胎内へやごるも又母の胎内で十月の間理を増すも生れ出るのも此刻四季がもとや依て子がうまれる時を四季理とゆう生れて後夜々せいじんするも又神の毛の、びるのも刻四季なり又死行も此刻四季なり。

草木の實が芽の切りだすもせいじんするも花のさくも實ののるも味じのつくのも此刻四季なり花の開くと云ふは日夜九とゆふて一日一夜に九十六四季の事をひやくとゆふ百とゆふ字も一日とかくも人間も世界も萬物もいき有ものもいきなきものも此刻四季でせいじんするなり。



四季の元は鹽なり此四季はきりくくくく四度づ、動く合數三百八十四度なり三百は水火風八十は八方八柱の神四度は四王の理四王とは刻四季の元なり此刻四季の時夜せいじんつよき朝顔や又山の芽の如きのびるものを夜中ためして見るべし必ず刻四季にはひりひりくくくこのびるなり又ものに味のつくのは此刻四季のたびくしほのぼりかんろの露となりて夜下るのを四季理で其物にたかす故萬事に味がつく者なり依て此四季は廣大もなき天あじはいのあるはなしなればめいくく我身に引合して委しく悟り考見るべし。

人間身の内の事

人間身の内最初母の胎内へやどり込むのは男女のいんすいなり、男のいんすいが五分女のいんすいが五分なり。

此水氣は、國常立之命月様の守護でやどり込む故子がやどりしより後は幾月とゆうて、幾日とも幾時ともゆはん、一月二月とゆうなり、此月様は身の内目胴水氣の守護なり、二月

目には面足之命日様のぬくみの理ゆるし被下此水きとぬくみは月日なり、三月目には國狹土之命様は皮繁ぎの理をゆるし被下る四月目には月讀之命様は骨と力の理をゆるし下被五月目には雲讀之命様は飲喰出入の理をゆるし被下る是で身の内五體とゆう此飲喰出入と云ふのは最初やどりてより元「よなと云者ありよなとは、よは月様など云ふも月の事なり。此よなは人間のへそなり此五月目より五體はかり母の日々食する者は母の身を頼ひよなへ戻り、よなより、へそのをもつたい、胎内の子をやしなひあまる所は又一すじの道よなへもごるなり、是飲喰出入の初めなり、此理は、なり物の柿でも蜜柑でも皆親木よりゆすありて其りゆすをつたいなり物を大きいしたり實を入もつたりするも同じ事なり人間でも子の出来るはりゆけいに實のなるのも同じ事なり其やどり込元は月水とゆうて月に一度づ、女には月水下るなりこれは人間の花なり此花の咲間は一月に十八日ある前六日につばみの如く中六日は満花の如く後六日は落花の如くなり此内に男女交合すればいんねんに依て子がやごるなり木の實でも月日のようきによりて花咲きても實ののらぬ事ありこれより木の



いんねんなり此如く五月目より胎内の子をやしのうはよな、なり六日目にはかしこねの命様はいき吹分言はの分る理をゆるし下さる是で身の内六九の守護とゆう男子をむすこと云ふも又女子をむすめゆうも此六柱の神の守護の理を云ふなり、七月目は、大食天之命様は十月目に子を産おろす時親子胎内の縁を切り理をゆるし下さるなり、又死行時は此の世のいきねの縁を切り下さるなり、八月目は大戸之邊命様は産時引出のりをゆるし下さる、九月目には伊邪那岐之命様は種の理をゆるし下さる、十月目伊邪那美之命様は苗代の理をゆるし下さるなり。

十月目産時のせわごりの神は親子胎内の縁切りは大食天之命様引出しは大戸邊之命様皮をのばし十月の間たまりし古血を下しあとを元娘の如くしまい下さるは國狭土之命様なり此三神の世話ごりにて産下しする故おひやをさんごゆうなり、元月日の守護でやごし込み又月日の守護で生れ出るなれどもあと八柱の道具ひながたを以て十月の間月日より守護下さるなり尙産下してよりも夜晝月日の身の内に入込此夜御照しの如く守護くださる故せいじ

んもする十用も叶ふ事なり身の内は神のかりもの人間は月日の遣ふ道具なり、依て人間は小天地とも云ふ身の内と世界は同じ事なり、其理由は左に記す。

子のやごる理

女子には月一度づゝ月水下る事十三歳より後は毎月なり是は草木に咲く花も同じ事なり、此時は二百十六時なり、前七十二時はつばみなり、此日数は六日なり、中七十二時は満花なり此日数も六日なり、後七十二時は落花なり是も六日なり。二百十六時の内に男女交合して男女のいんすい五分の理と天地いんねんの理に依て子がやごまる是は両親の心通りと前世のいんねんに依て男女の子やごり込なり、やごまるごは月ごまるとゆう事なり、胎内にやごまりてより日々理がまして五りん五たいとなる此四季数は二萬七千三百六十四季なり。時数は三千四百二十時なり。